

市民の意見

発行：市民の意見30の会・東京

NO.129

2011/12/1

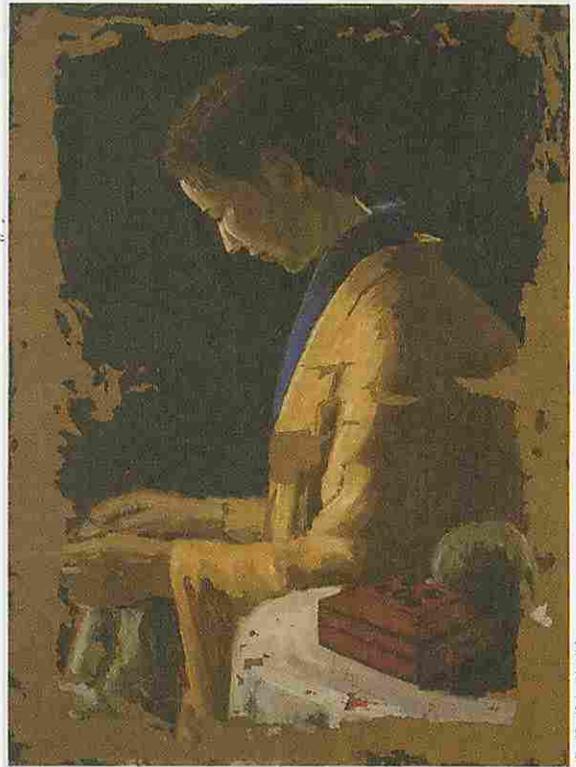
【毎月数日1日発行】



発行者の住所：〒151-0051 東京都渋谷区千駄ヶ谷4-29-12-305 TEL:03-3423-0185 FAX:03-3402-3218
 郵便振替：00120-9-359506 eメール：iken30@mwb.biglobe.ne.jp ホームページ：http://www1.jca.apc.org/iken30
 * 隔月刊/購読料・送料とも年2500円、一部400円、65歳以上および身障者の方は年2000円、グリーン会員の方は年1000円

あ、こんなに傷んじゃって……
 武さんに申し訳ない。
 義妹さんの佳子さんが、二階の物置の奥から
 風呂敷にくるんだ絵を出しながらそういった。
 古びたキャンバスから絵の具のかけらが
 パラパラと落ちてくる。
 でも、今ならまだ大丈夫、まだ間に合う、
 すぐ東京の修復屋さんに出しましょう、と私。
 まるで、ジグソーパズルみたいに
 壊われた絵だったけれど、
 その絵はまだかすかに呼吸しているようだった。
 五十年間の長い地中生活から、
 まだ息のあるうちに武さんの絵は生還したのだ。
 もうすぐ七十歳になる佳子さんは、
 戦死した武さんの身体を拭くように、
 絵の上の埃をそっとはらった。

（窪島誠一郎『無言館戦没画学生「祈りの絵」』講談社刊より）



興梠武「編みものする婦人」
 （無言館所蔵）

市民の意見 129号 目次

○巻頭詩 「反対」

金子光晴 2

●特集 日米同盟がもたらすもの

米国の核戦略と日本の原発 浅井基文 4

日米安保と沖縄 私論・異論 山本英夫 6

米国に追従するTPP参加 大野和興 8

●運動の現場から

新宿デモ／不当逮捕の実態 ゆみ 11

福島の人たち／座り込みから始まる連帯 人見やよい 12

脱原発デモ／経産省を完全包囲 杉原浩司 14

「君が代」不起立最高裁判決の問題性 渡辺厚子 15

「ここから裁判」再び勝訴 洪美珍 16

वादつみ会「中国との戦争と戦没学生」 高橋武智 17

○福島原発の電力で暮らした方々への手紙 秋山豊寛 18

○自衛隊／レスキュー、防災の論じ方 天野恵一 20

○「父たちの「戦場」に暮らす人びと」 加藤克子 22

○斉藤憐さんの死を悼んで 本野義雄 24

○吉川勇一・武藤一羊／160歳の反戦交友録 鈴木一誌 28

●文化 連載エッセイ26 原稿用紙の変転 本野義雄 29

映画の紹介 「ニーチェの馬」 天野恵一 30

本の紹介 原発被爆労働者問題／樋口健二の仕事 まつただたえこ 34

まんが ふしぎの国のありか 34

●情報

読者懇談会報告 10 電子版「市民の意見」頒布 34

読者のおたより 32 インフォメーション 31

事務局だより 野澤信一 35

編集後記／会計報告 36

◆題字 安西賢誠 ◆カット 村雲 司

反対

金子
光晴

僕は、少年の頃

学校に反対だった。

僕は、いままた

働くことに反対だ。

僕は第一、健康とか

正義とかが大きらひなのだ。

健康で、正しいほど

人間を無情にするものはない。

むろんやまと魂は反対だ。

義理人情もへどが出る。

いつの政府にも反対であり、

文壇画壇にも尻をむけてゐる。

■ 詩の作者 ■

かねこ・みつはる 1895年(明治28年)12月愛知県生まれ。24歳のときに欧州に渡り1年半滞在。帰国後、結婚。どん底の貧乏暮らしの中で日本を脱出。足かけ6年にわたるアジア、欧州外遊で、植民地主義、国家主義への批判を養ったとされる。長く日本を留守にし、経歴が憲兵に知られていないことも幸いして、比喩的な天皇制批判、日本軍批判、厭戦の詩を次々に発表、戦時中も反戦詩を書き続けた。生涯を通して痛烈な批判と反骨精神を貫く。「反対」は詩作を始めた22歳の頃の初期の作品。1975年6月没。

なにしに生まれてきたと問はるれば、
躊躇なく答へよう、反対しにと。

僕は、東にゐるときは、

西にゆきたいと思ひ、

きものは左前、靴は右左。

袴はうしろ前、馬は尻をむいて乗る。

人のいやがるものこそ、僕の好物。

とりわけ嫌ひは、気の揃ふといふことだ。

僕は信じる。反対こそ、人生で

唯一つ立派なことだと。

反対こそ、生きてることだ。

反対こそ、じぶんをつかむことだ。

(岩波文庫『金子光晴詩集』1991年11月(株)岩波書店発行) 捨遣詩篇「一九一七年ごろ」より)

▼表紙絵の作者▲



興 武

(こうろぎ・たけし)

1917(大正6)年1月15日、千葉
県木更津市に生まれる。35(昭和10)年
4月に東京美術学校(現・東京芸術大学)
油画科入学、藤島武二教室にて級長を
命じられる。40(昭和15)年4月より9
月まで研究科在籍。41(昭和16)年2月、
都城連隊に入営し、満州(中国東北地方)
ハイラルよりフィリピン、ルソン島へ
転戦。45(昭和20)年8月8日、ルソン
島のルソド山において戦死。享年28歳。

米国の核戦略と日本の原発

浅井基文



う本質において原水爆（核兵器）となんら変わることはない。唯一の違いは、核兵器が核分裂反応を瞬時かつ無制御で起こさせることで発生する膨大なエネルギー（熱線、爆風及び放射線。ただし、アメリカの公式政策では放射線をことさらに無視・過小評価してきたことは後述）を殺戮・破壊目的に利用することを目的としているのに対し、原発は、核分裂反応を人為的に制御しながら持続的に行わせることで生みだされるエネルギーを利用して電力を生産するという点にある（傍線は筆者）。

今日主流の座に押し上げられている原発（ウランとプルトニウムの混合燃料を使うプルスーマル原発については、ここでは触れない）に関していうならば、そうした核分裂反応を起こす物質（核燃料）は、ウラン235という放射性物質（ちなみに、発電用には低濃縮ウランを、兵器用には高濃縮ウランを使う）であり、また、核分裂反応は放射線を放出し、使用済み核燃料は様々な放射性物質を生みだすが、その中には長崎型原爆で使われたプルトニウム239を大量に含む。したがって、原発は本質的に核兵器拡散の契機を内在している。最近原発廃止論が高まっていることに警戒感を強めている保守

政治家や評論家が、「日本が核兵器開発能力・潜在的核抑止力を持つために原発は必要」という趣旨のホンネ発言を相次いで行うようになった（例：7月14日の石原都知事、7月18日の櫻井よしこ、8月16日の石破・自民党政調会長）のは、彼らの主観的意図はともかく、プルトニウムを「生産」する原発の危険を極める本質を客観的に裏付ける貴重な(?)ものではある。

とにかくここでのポイントは、核兵器と原発は核分裂エネルギーを利用する技術であり、人体及び環境（人間の生存条件）に深刻な影響を及ぼす放射線・放射性物質を必然的に生みだすということだ。そして福島が重要な意味をもつのは、広島及び長崎においては残留放射線・低線量被曝や内部被曝による影響がことさらに無視・過小評価されてきたのに対し、今回の事態に際してこれらの問題が非常に重大な問題であることがもはや隠し通せなくなつた、ということである。

仮に原発が安全基準をクリアした確立した技術に基づいているとすれば、今回のような福島の事態は起こるはずがなかった。しかし、早くから指摘されてきたように、①核分裂反応により、人体に深刻な影響を及ぼす放射線を出すし、その放射線は無害化できない（放射線が自らを弱めていくのを待つ以外にないが、半減期の長い放射性物質であればあるほど長い期間にわたって放射線被害の危険が持続する）、②発電

福島第一原発に非常事態が発生してから、日本社会では俄然原子力発電（以下「原発」）問題に対する国民的関心が高まつてきた。本質的に「欠陥商品」でしかない（そう断定する根拠は後述）原発は廃止しなければいけないと常々考えてきた私からすれば、福島の事態は「起こるべくして起こった」悲劇であるが、私たちは、ただ落胆しあるいは悲憤慷慨するだけで済ませてはならないと思う。即ち、この事態・悲劇から学ぶべきことを正確に学び取り、原発のない日本・世界を実現すること、そしてより根本的には、原発を生みだしたアメリカの核政策そのものを見据えて、日米核軍事同盟そのものを清算する（その意味において戦後日本の政治のあり方を根本から立て直す）こと、そうすることによって21世紀を子々孫々にわたる人類の持続可能な平和的發展への礎をつくり出す最大のチャンスとすること、要するに「災いを転じて福となす」ことに私たちが全英知を傾注することが今何よりも求められていることだと確信する。

起るべくして起った福島の悲劇

原発は、核分裂エネルギーを利用するとい

減期の長い放射性物質であればあるほど長い期間にわたって放射線被害の危険が持続する）、②発電によって生みだされる放射性廃棄物（及び廃炉される原発）の最終的処分をめどはない（た

め込むしかない)、③核分裂反応を完全に人為的に制御することは不可能、という人知では克服し得ない本質的かつ致命的な欠陥を原発は内包している。「原発は致命的な欠陥商品」と言わなければならない理由がここにある。福島第一原発のケースは、そのことを余りにも高すぎる犠牲を生みだして証明したということなのだ。

何故「原子力平和利用」神話か？

—アメリカの核政策を見きわめる

紙幅が限られているので結論をいえば、アメリカの核政策の根っこにあるのは、核(原子力)・エネルギーを解放したことは正しかった、広島・長崎に対する原爆投下は正しかった、したがって将来的にも核兵器使用が正当化される場合がある、しかも核兵器・核エネルギーを野放しにすることはアメリカの安全保障を脅かすからできるだけアメリカのコントロール下におきたい、ということだ。そのため日本を含めた同盟国に対して拡大核

以来の核政策を将来にわたって堅持するという結論が先にあり、そのためには広島・長崎に対する原爆投下は「犯してはならない誤りだった」ことを絶対に承認しないのだ。逆に言えば、アメリカをしてその核政策を改めさせるための出発点は、アメリカをして広島・長崎に対する原爆投下の誤りを承認させることである。

抑止(核の傘) 政策
を行う(日米安保が核軍同盟である所以) ことにな
る。つまり、
1945年

多くの被爆者が広島、長崎に生存して放射線被害に苦しんでいることを認めざるを得なかったアメリカがとった政策は、その事実を隠す(原爆がもたらす放射線被害の残酷を極める、犯罪的・反人道的な本質が明らかになれば、そのような兵器を使用したアメリカの戦争責任が国際的に問われることを恐れた)とともに、「核キノコ雲」のイメージを払拭するために「原子力平和利用」計画(1953年にアイゼンハワー政権が打ち出した *Atoms for Peace* 提案)によって原子力発電を本格的に推進することだった。国際問題研究者の新原昭治氏がアメリカ側の文献に基づいて明らかにしているように、その際に原発の安全性に関する検討が行われた形跡はない(『非核の政府を求める会ニュース』10月15日号)。つまり、軍事核戦略を正当化するための「イチジクの葉」として利用されたのが「原子力平和利用」計画だった。本質的な欠陥商品を「原子力平和利用」の目玉として売り込む政策の必然的な帰結がスリーマイル、チェルノブイリそして福島だったということだ。

この点でどうしても指摘しておかなければならない事実は、オバマ政権のもとにおいても、以上のアメリカの核政策は微動だにしていなかった。世界、特に日本においては、オバマのいわゆるプラハ演説(2009年4月5日)以来、オバマは「核のない世界」の実現を目指す大統領というイメージが作り上げられた(その点に関する日本を含めたマス・メディアの責任は実に重い)。しかし、オバマ政権3年余の実績が雄弁に証明している事実は、「核のない世界」はせいぜいビジョンに過ぎず、核抑止力を堅持し、原発推進をはじめとする「原子力平和利用」政策を推進する点でオバマ政権は従前の政権となら変化はないということだ。

アメリカの犯罪的政策に加担した日本と私たちの責任

日本の戦後保守政治は、平和及び核にかかわって、いくつかの致命的な犯罪的政策を選択・遂行してきた。それは「仕方なし」の平和憲法・国民主権・民主化の受け入れに始まったが、米ソ冷戦激化を受けたアメリカの対日政策の180度の転換による、日米安保条約締結を引き替えた独立回復、アメリカの核政策(拡大核抑止(核の傘))の積極的受け入れに集中的に具体化された。原爆体験に基づいて戦争放棄を定め、平和立国の方向性を打ち出した日本国憲法は、戦後保守政治によって一貫して目の敵扱いされてきた。1

年余の政権運営が余すところなく明らかにしたように、民主党政治も核・安保政策において自民党政治と何ら変わるところはない。

しかし、広島・長崎が人類に残した最大の歴史的教訓は、戦争はもはやあり得ない。あつてはならない政策的選択肢であるということ、福島が今改めて語っていることは「原子力の平和利用」もまたあり得ないということだ。広島・長崎を体験した私たち日本人がなすべきは、アメリカをして核固執政策を改めさせること、そのためにも「核兵器の使用は正当化される場合がある」とする出発点にある発想の誤りをアメリカ自身に認識させることである。そして、「原子力平和利用」という考え方は成り立ち得ない神話であり、私

日米安保と沖縄 私論・異論

笑うしかなかったある電話のはなし

「日米安保と沖縄」とのタイトルを編集部から頂いたが、私的な事柄から書き始めることを許されたい。去る9月6日午前10時過ぎ、ある沖縄の女性からお電話を頂いた。彼女は開口一番、「踏まれても、蹴られても、なんて言う奴がいる」と怒り一杯。私は何だかさっぱり分からず、うろたえながら、話の脈略を聞き取る。これは、玄葉外務大臣が記者

たちは脱原発によってのみ21世紀以後の人類の明るい展望を切り開くことができるということ、日本こそが世界の先頭に立って実践して証明することでなければならぬ。そのためには、日米核軍事同盟を清算し、平和憲法に基づいて戦後日本政治のあり方を根本から改めることが求められる。福島の悲劇的教訓を生かすのはこの道をおいてほかにはない。

(あさい・もとふみ／1963年3月、東京大学法学部中退。同年4月、外務省入省。国際協定課長など国内外の勤務を経て1990年3月外務省辞職。日本大学法学部教授、明治学院大学国際学部教授を経て、2005年4月から本年3月まで広島市立大学広島平和研究所所長)

山本 英夫

会見で語った言葉であり、奴はこう語り、沖縄に基地をもういっちょお願いね、と言ったようなのだ。彼女はとんでもなく怒っており、その怒りを私にぶちまけたのだ。そう言われたところで私には、どうすることもできず(何が何だか分からず)、咄嗟の防衛反応から、笑うしかなかった。この場面での笑いは、事の成り行きをごまかすことであり、相手に対して非常に失礼であり、「奇麗事を言っても、やっぱりヤマトの人間は何も分かっている

ない」と思われかねない、愚かな対応だった。

この数分間の電話の中に生じた、彼女と私のとてつもない厚い壁。これは「日本」と沖縄の分断状況を如実に示しているのだ。彼女は沖縄の反戦活動家ではない。基地のそばに住んでいるただの主婦だ。たまたま在京の息子さん宅に滞在されていた今春、私の沖縄に関するスライド&トークのチラシを映画館で手にされ、私の写真展会場までお出でになったのだ。このとき彼女は「日本」で沖縄問題に取り組んでいる私に対して熱き(過大な)期待を語られた。今、「ただの主婦」と書いたが、このへん

にいる市民運動家が自称する「ただの主婦」(失礼ながら)ではない。基地のない、ある琉球弧の島から、おつれあいの転勤で、沖縄島に移りすんだら、基地というものに直面したと言う。そのすさまじさに仰天されながら、新たなシマ(集落)は基地交付金等のしがらみで、基地反対などと言いくいとおっしゃる主婦だ。



普天間基地で離発着訓練を繰返す KC130 空中給油機

このたつたひとつの話の中に日米安保と沖縄の関係が詰まっている。私達（読者の皆様を含む）が何を問われているのかを考える素材が満載されている。日米安保は沖縄の生活ぐるみを縛っており、沖縄と「日本」の人々の関係を縛っているのだ。

私がこんな私的なエピソードを持ち出したのは、「日米安保と沖縄」を、ただの政治論で語りたくないからだ。「日本」に住んでいる私達が政治論を語れば語るほど、沖縄を他人事にしてきたのではないのか。沖縄から聞かえてくる怒りの言説「基地はヤマトに持って行け」論は、こうした私達に対する批判（根みつらみ苛立ち）を込めたものではないのか。

玄葉光一郎君の発言を考える

彼が記者会見で言い放った「踏まれても、蹴られても」は、外務大臣として、見事なまでの空っぽさを露出したものだ。日本政府が、日本権力が沖縄に歴史的に強いてきた差別をまるで自覚しない、ひとかけらの反省もないことを公言している。彼は、野田首相、野党、マスコミの誰からも罷免すべしとの批判を浴びていない。これで、「沖縄を説得する」などとのたまうのだ。この発言は、外務官僚からの入れ知恵に違いないが、何とも浅ましい。踏んで、蹴って、殺してきたのは、あなた方ではないか!!。怒髪天を衝くとは、このことである。

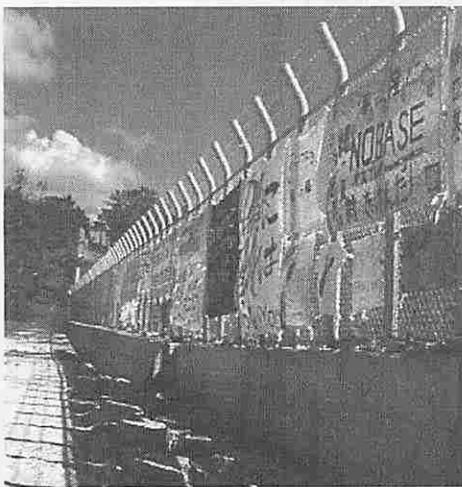
こうした状況を考えると、野田政権は、「沖

縄を説得する」と口で言うが、いざとなれば、強引に押しつけてくるに違いない。私達は、彼らが何をやっているのか、やろうとしているかを冷静に見抜かねばなるまい。

9月の日米首脳会談を受け、野田政権は、本格的な沖縄落としを開始した。この政権は、仲井眞沖縄県知事が何度「県外移設」を主張しようとも、意に介せず、遮二無二辺野古に新基地を造ろうと躍起になっている。10月に入ると、防衛・外務・沖縄担当などの閣僚が沖縄詣でを繰り返している。

フェンスとアクセス

辺野古浜のキャンプ・シュワブとの境界線に、コンクリートブロックを基礎にしたフェンスができたのは、去る5月だ。生きものたちの棲家である、さんごの浜をかき回して、米軍はこの異物を造成した。辺野古テント村



辺野古浜キャンプ・シュワブに巡らされたフェンスに取付けられたバナー

の人々は、この異物を逆に展示場とした。全国各地から寄せられた基地反対の100枚余りのバナーを張り巡らし、お披露目を沖縄のマスコミに取材頂いたので。それから5ヵ月が経った。バナーは米軍によって、何度も撤去され、また張りなおす、このいたちごっこが続いている。もつとも台風接近の度にこのバナーを撤去し、また張り直すこともあり、これにかかるエネルギーは、並大抵ではない。いささか語呂合わせのようだが、米軍がフェンスを張ったかと思えば、野田政権は環境アクセスメントの最終過程、評価書を年内にも沖縄県に出そうとしている。辺野古基地建設は不可能とする観測が米国の上院軍事委員会のラビン議員らを含め各方面からあがり、米日両国が、財政破綻を深め、まして日本は震災や原発事故で、ひどいことになっているのだが、事態は一向に変わらないのだ。

何が問題なのか

防衛省が、アクセス評価書を県に出し、環境大臣の意見が寄せられても、防衛省は、遅くとも県に提出6ヵ月後には、公有水面埋立法の許諾を県知事に求めてこよう。知事がこれを拒否すれば、国は県を裁判に訴えるか、同法の改悪を強行し、県知事の権限を剥奪する可能性もある。こうなれば、「日本」政府対沖縄の全面的な対決になるだろう。

今、閣僚が沖縄詣でをやっているのも、前原政調会長らが沖縄の基地推進派強化策の裏

工作の陣頭指揮を行っているのも、「オール沖繩」の態勢を覆したためだ。その最大の眼目は「海にも陸にも基地を造らせない」を貫いている名護市の稲嶺進市政を潰すことだ。

現に名護市議会の推進派は、市長に対して、辺野古テント村の撤去を再三要請し、それが適わぬと見て、辺野古区内での撤去署名を始め、11月3日には直接、テント村を訪れて、撤去を迫っている。

ここにも基地交付金が影を落としている。お金と近隣のしがらみの中で、住民の本音が押し隠されているのだ。

私達は、防衛省に対して、アセス評価書を出させない取り組みを強め、法改悪を阻止すべくロビー活動を至急開始すべきだろう。また、沖繩に対する一括交付金の行方に注目し、中央政治に組しなければ生きていけないような行財政の仕組みを、沖繩の人々と共に徹底的に阻止し、改革することが必要だ。

本誌編集部は、「日米安保と沖繩」を書けたといったのに、これは何だということかもしれない。しかし、安保の現場に密着してみれば、こうした観点からの対話と分析が不可欠だと私は考える。また、私の企画「いつのまにかオキナワの空の下を歩いてきた」（11月26日、27日）などでも私の沖繩への拘りを語るつもりだ。是非お出かけ願いたい。（11月5日記）

（やまもと・ひでお／フォトグラファー、写真も）

米国に追隨するTPP参加

太野和興

日米首脳会談で迫られた宿題

TPP（環太平洋経済連携協定）交渉参加に向けて、野田政権の異様に前のめりの姿勢が目立つ。この協定、自由貿易は良いものだという政府や経済界と同じ前提に立つて分析しても、日本経済の得にはならないばかりでなく、マイナスに作用することも十分に考えられる。それなのになぜいまTPPなのか。そのことを考えてみる。

9月22日、首相就任後の初めての野田とオバマの会合は面白かった。にこやかに野田を迎え、二人は握手し椅子に座る。二言三言。オバマ大統領がにこやかだったのはここまで。一瞬にして厳しい表情を貼り付けたオバマが何やら野田にいう。テレビの映像はここで切れるのだが、その後の問答はおおよそ想像がつく。

ぐいと顔を野田に近づけたオバマは、開口一番「普天間はどうするつもりだ。早く結果を出せ」とまづかました。続いて、「前からアメリカの牛肉は安全だといっているだろう。20カ月以下の若牛の肉しか買わないなんてせいこいこともうやめろよ。早く輸入制限を撤廃

しろ」とぐっと声を落として迫った。そして最後。やや声の調子を上げ、「TPPはどうした。まさか忘れてるんじゃないぞ」。どきまぎ震災なんぞ言い訳にならないぞ。どきまぎした野田はおでこをビシヤンと叩いて、「恐れ入りやした。へえへえ、なんとかします」。大筋、こんなところでまちがいはないはずだ。読売新聞はさつそく9月23日の社説で「同盟深化へ『結果』を出す時だ」と煽り、TPPについて「11月（APECホノルル首脳会議）が日本参加決断の期限」と尻を叩いた。

歩調を合わす経団連とマスコミ

聞きなれないこのTPPという言葉が政治の舞台に登場したのは、2010年10月1日、菅前首相による衆議院所信表明においてであった。TPPは参加国の間で貿易・投資・企業活動の徹底した自由化を進めようというもので、ここへの参加は、農業、労働や環境、人々の人権や生存権にからむ公共サービス、食の安全など国民生活の隅々にまで影響を与える。それまで政府部内でも国会でも公にはほとんど議論された経過はなかったが、経済界は早速歓迎の意を表し、メディアには「こ

のままTPPの協議に参加しなければ日本は滅んでしまう」という論調があふれた。

その矢先、3・11が襲った。この未曾有の危機に、TPP論議は先延ばしとなったが、それもいつときで、大震災後1ヵ月もたつと、またぞろTPPを進めるといふ掛け声がかしましくなった。日本経団連は4月18日、日本の通商戦略に関する提言を発表した。提言は、大震災後、論議が停滞しているTPPについて、「早期参加は依然重要な政策課題」としたうえで、「震災後の経済復興に向けたグローバルな事業展開、円滑なサプライチェーンの構築に不可欠」と主張。参加しなければ「国内生産拠点がTPP参加国に移転してしまう」と、脅しとも見える言及をしている。

続いてマスメディアによるTPP推進の大合唱が再びはじまった。その第一陣が5月15日の読売新聞の社説、「TPP参加で復興に弾みを」である。同社説は「自由貿易を拡大して、経済成長を実現することが東日本大震災の復興にも欠かせない」という書き出しで始まるものだ。大手新聞、テレビがそのあとを追った。



米国主導のアジア経済戦略

TPPはもともとシンガポール、ニュージーランド、チリ、ブルネイという小国が集まって2006年に発効した地域的な自由貿易協定(FTA)であった。特徴はモノとカネの動きについて徹底した自由化路線を打ち出していることだ。貿易については例外を認めず全品目について関税を撤廃することを打ち出し、さらに公共サービス、政府調達、知的所有権、人の移動なども包み込む包括的協定である。内容が過激な割に注目されなかったのは、関係国が極めて小国であり、影響力も小さいとみられていたからだ。2009年11月にシンガポールで開催されたAPEC(アジア太平洋経済協力会議)で米国のオバマ大統領が突然参加を表明、注目を集める存在となった。米国に続いてオーストラリア、ペルー、ベトナム、マレーシアが現在参加交渉に入っている。

米国の参加を境に、小国どうしの連携をめざすものだった同協定は大きく性格を変えた。徹底した自由化路線を維持しながら、米国が主導する広域経済連携をめざす存在になった。さらに2010年11月に横浜で開かれたAPEC首脳会議で、APEC参加21カ国を枠組みとするアジア太平洋自由貿易圏(FTAAP)を実現するための土台として「ASEAN(東南アジア諸国連合)+3」、「ASEAN+6」と並んでTPPが位置づけられた。

世界の成長センターとしてこれからの世界経済を先導するとされている東アジア(北東アジア・東南アジア)の経済連携をめぐるのは、米国と中国が主導権をめぐってしのぎを削っている。しかし、この地域ではアメリカの影は薄く、中国が主導権を握り始めているのが実態だ。そんな米国にとってTPPこそが自らが自在にふるまえる場なのである。TPPを言い出した菅前政権のTPP論議はこうした政治力学の中の選択なのだということを押さえておきたい。

日米同盟とTPP

メディアの動向にそれはよくあらわれている。先鞭を切ったのは朝日新聞であった。菅首相(当時)が国会で発言した直後の10月8日、朝日はワシントンで米外交問題評議会と共催で日米同盟に関するシンポジウムを開催、パネリストで出席した船橋洋一主筆(当時)は、「日米同盟の課題の一つは」TPPに日本も参画し、日米が提携して『自由で開かれた国際秩序』を作ることだ」と発言している。

11月には読売新聞が同紙の看板コラム「地球を読む」に葛西敬之JR東海会長を登場させ、「日米同盟はまさにわが国家安全保障の基軸であり、TPPはその展開形である。速やかに参加し、米国とともに枠組みづくりを名乗りを上げるべきだ」と発言させている。

最近では、読売新聞の10月6日社説が「TPPは」膨張する中国をけん制することにも

「2011年3・11から 8・6、8・9へ」

諸橋泰樹さんを囲む読者懇談会の報告

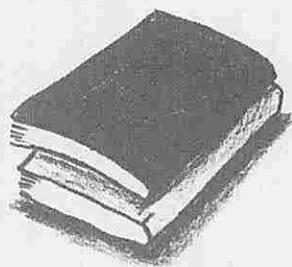
10月21日にビーブルズ・プラン研究所で、本誌128号の『66年目の広島と長崎を訪れて』の執筆者、諸橋泰樹さん（フェリス女子学院大学教授）を囲んで読者懇談会をおこないました。

全国を飛び回りながら、母上の看護・介護の日々を送られるなか、貴重な時間を割いて来ていただきました。諸橋さんは本誌の編集委員でもあり、この第1回の読者懇談会のゲストだったそうです。久々にお会いできるとあって多くの編集委員も参加しての会となりました。

1時間にわたってのお話は、3・11以降、ご自身が出かけていった現場で撮った、多くの写真画像を見ながらのものでした。

東日本大震災から原発の人災事故につながる過程は、まさに本誌128号のなかで指摘されている「再帰的近代化のなれの果て」（16頁）であるといえます。3月11日以降の、東京のご自宅近くで撮られた生活場面の画像や、6月末にご自身が訪れた宮城県石巻市の被災地の画像を見ながら「あ

らゆる近代化の行き詰まりに対して、原発も含めて、科学でおさえこむのは無理」とあらためて指摘されました。



にもかかわらず「原発は必要なのだ」と言ってはばからない人間が後を絶たないのは一体なぜなのか。「経済」を優先し、人々の「生活」をないがしろにする近代の矛盾を、いい加減このままにはしておけないと強く感ぜずにはいられませんでした。

そして今年の広島・長崎。フクシマと連帯する論理の展開と原発の新しいグループの参加、さらに長崎平和宣言のように、3・11以降のフクシマが加わることで核兵器だけでなく原発も含めた核を考える「新たなステージに入った」と――。

かつてない状況下で、「これから」を考える、良い機会となった読者懇談会でした。

高岡甫雅（たかおか・やすまさ／本誌編集委員）

つながろう」と書き、TPPは経済に軍事を絡めた中国包囲網であることを明確に述べている。民主党政権にとっては、普天間移設問題で揺らぎ、尖閣での日中衝突でその効用を再認識させられた日米同盟を立て直す切り札だったのだ。

TPPの本来の対象である経済に限ってみれば、効用よりも弊害が目立つ。成長のアジアのカギを握る中国は参加の意思を全く示していない。韓国は米国議会がやっと批准した韓米FTAで野党の反対にあい立ち往生している現状で、TPPは全く念頭にない。アジアの経済大国中国も韓国も、そしてインドもTPPには関心を示していないのが実情だ。

経済からのみ考えたら、TPPよりも日中韓にASEAN、インドを加えた自由貿易圏をめざすほうがよほど効率的だしまみがある。経済的意味はほとんどなく、逆に農業や食の安全、労働や公共サービスなど国民の生存権にとって厄介事を背負うことのほうが大きいTPPに政官経そしてマスメディアが血道を上げる理由は、アメリカの戦略への追従という以外に考えられない。そして、その底流を探っていくと、日米安保条約の経済条項にゆきつく。日米安保のもとで、軍事と経済はもともと一体のものであった。その意味で、沖繩・核・TPPもまた、一体のものとして私たちは捉えなければならないのだと思う。

（おおの・かずおき／農業記者）

脱原発デモにおける一般参加者に対する不当逮捕の実態

ゆみ



私達夫婦は3・11以降、国と東京電力に対し大きな不信感を抱き、脱原発デモなどに積極的に参加して来ました。9・11のデモは、仕事の兼ね合いでスタートから参加できず、デモ後の集会から参加するため、夕方、新宿駅に到着しました。その日の形相は白い防護服に全面マスクにヘルメット。原発作業員の方達の格好をしていました。デモ隊はまだアルタ前広場にはまだ到着していなかったの、デモ隊を探しながら新宿を歩き始めました。新宿三丁目の交差点に差しかかろうとした際にデモ隊が見えたので向って行きました。その時、道路にアンチ脱原発の集団が陣取り、3人目の逮捕者が出た直後のデモ隊に対し暴言を吐いていました。フランクの逮捕は彼らの叫んでいた言葉が発端となります。その内容を後に文字起こししたものがこちらです。

「3人逮捕、おめでとうございます！皆さん、見て下さい、見て下さい。あれが今日3人逮捕された反日集団の犯罪者のデモ行進でございます。よく見て下さいね、犯罪集団が皆さんの目の前を通ります。子供を殺すのはこの連中です。実際に何百人の子供が死んだと思ってるんだ！その責任はお前達にあるんだよ！子供の命を守るぞ！犯罪者から子供の

命を守るぞ！（ここで私が夫のフランクに彼らの発言の内容を訳し、集団に対し抗議の意を表すため彼が前に出る。）おい、なんだよ。ウジムシは日本から出て行け！犯罪者は日本から出て行け！犯罪者を逮捕しろ！犯罪者をたたきこめ！犯罪者を生きのまま、原子炉に叩き込め！さっさと逮捕しろよ！何の為に君たち警察はやっているんだよ！（私はフランクを押さえデモ隊に入ろうと促し、その場を去ろうとしたその時、警察官が背後から柔道の足技みたいな方法でフランクを地面にうつ伏せに押し倒す。私は彼を助けに行こうと近寄るが、複数の警察官と押し問答になり私もうつ伏せに倒される。フランクは私と離れない様に私の足を掴むが、警察官に引き離される。そのため、着ていた白い防護服はズタズタに。私とフランクは集団の後ろ側に別々に連れて行かれ、フランクは護送車に乗せられます。私も婦人警官二人に両脇を拘束されていた。彼は日本語が話せないのだから彼と同行させてくれと頼んだが、参考人として連れて行かれ、新宿署の前で彼と私の名前、生年月日、連絡先等を伝えると帰っていいとミニバトから降ろされた。）やく逮捕！おめでとうございます！射殺しろ！警察は犯罪者を射殺しろ！逮捕なんて生ぬるいことやるな

よ、片付けろ！逮捕じゃなくて射殺しろよ！殺せ！不当逮捕って言う前によく反省してください！熱中症でね、子供やお年寄りをさんざん殺したんだよ、お前達。中核派は日本から出てゆけ！新宿署は中核派を逮捕しろ！」

逮捕後も酷いもので、フランス語通訳を付けてもらったらしいが調書はでっちあげそのもの。公務執行妨害罪で内容は①警察官に暴言を吐いた②警察官のホイッスルをひきちぎった③警察官に暴力を振った。事実無根の内容です。その為に48時間監禁され、自由を奪われました。

釈放後、調書の内容を東京地検に問合せしましたが、開示は出来ないとの返答。48時間も無意味に自由と人権を奪われた逮捕の理由を、本人が知る権利すら無いのです。また、暴言を吐いていた集団が公道を占拠し抗議集会をする許可を取っていたかどうかも確認しましたが「無許可」とのこと。人権侵害と取れる発言に対し警察官は取り締まらないのかとの問いに「彼らにも表現の自由があるので取締りはできない」との返答。フランクは「抗議の意を表しただけ」で「逮捕」されたのに「射殺しろ」等と叫んでいた人達の表現の自由を守る警察に大きな矛盾を感じました。

（ゆみはペンネーム。フランス人のフランク氏と国際結婚し日本在住10年目。フリー・デザイナー）

運動の現場から

座り込みから始まる連帯

人見 やよい



進まない国の方針転換

福島原発事故が起きて、私たちの生活は一変しました。一時は「死」をイメージしましたし、安全な空気、水、食べ物など、当然のように受け取ってきた暮らしを失いました。そんな中で唯一うれしかったのは、「これで国策・原発政策は間違いなく止まる！」という確信でした。これほどの大事故を引き起こした以上、「原発は安全」だと信じる人はいなくなつたはずですし、その確信の通りに、世論調査では脱原発を望む人が8割を超えていきました。しかし聞こえてくるのは、玄海原発や泊原発の再稼働、原発の海外輸出など、相変わらず原発政策を押し進める声ばかり。国の方針を転換させるのは、これほどまで難しいことなのかと、目の前が真っ暗になるほどでした。

東京で座り込もう！

そんな中、「東京に座り込みに行きたいって話が出ているんだけど」と、武藤類子さん（ハイロアクション世話人）から連絡が来たのが9月29日のことでした。「何か行動しなければ

ば」と思っていた矢先、私も話し合いの輪に加えていただきました。最初はこぢんまりと4人の女性が集まり、「福島の女たち100人で座り込むに行く」という目標だけが決まりました。専用のブログを開設して賛同者の募集を始め、10月4日に第1回ミーティング開催。「ついに……女たちは立ち上がり、そして座り込む！」というキャッチフレーズと「原発いらない福島の女たち1000人の座り込み」というタイトル、10月27～29日の3日間という日程が決まりました。福島の原発事故がまるでなかつたこととして風化されそうな恐怖、そして再びこのような悲惨な事故は必ず起こるであろう恐怖に、私たちは黙っているわけにはいけません。そして、原発を受け入れてきた立地県の住民として、原発からの卒業を宣言しに行く責務があると考えるのアクションでした。

正式に参加者募集を始めたのは10月5日です。ブログでの募集記事にはたくさんの方の応援がきました。ツイッターやフェイスブックで次々と情報を広げていただき、全国から賛同と支援の手が差し伸べられたのです。連帯の輪も広がっていきました。まずは「全国の

女たち」から、「福島の女たち」が座り込む3日間につなげて、30日から11月5日まで座り込みを1週間継続します」と連絡が入りました。その後は、大阪のおかんとおとん、広島、京都、富山、北海道、和歌山、ロスアンゼルス、ニューヨークから、「私たちも座り込みます」「チラシ撒きをします」という報告が次々飛び込んできました。座り込みへのエントリーも日に日に増えていきました。「福島の女たちが声を上げてくれるのを待っていただきました」というメッセージをたくさんいただきましたし、県外に避難中のお母さんたちからも「ぜひ、駆けつけます。このようなアクションを呼び掛けてくれてありがとうございます」という声も多数届けられました。

膨れ上がった支援の輪

そしていよいよ迎えた座り込みの当日、私たちは目を疑うような光景を見ました。どこまでも続く人、人、人。思いを込めたプラカードや横断幕を手に、経済産業省前に大勢の人たちが集まっていました。それは「1000人で座り込む」という私たちの目標を遥かに超えていました。最終的に参加受付人数は、27日は県内70人、県外735人、28日は県内65人、県外608人、29日は県内75人、県外818人で、3日間で合計2371人にもなっています。

座り込みの最中も「福島は今どんな感じなの？」「私たちに何かできることはない？」と、



福島からの参加者たちはあちらこちらで質問攻めにありました。「全国原発止めなくちゃね!」「世界の原発も止めなくちゃね!」「女たちが変えていかなくちゃね!」とたくさんの方の女性たち、そして男性たちと、同じ願いを持ってつながっていきける、活動していきけるその感動だけで今回アクションを起こした意義があったと感じるほどでした。

私たちは、要請書の申し入れも行いました。要請したのは次の4点です。

(1) すべての原子力発電所を直ちに停止させ、廃炉とすること。

(2) 定期点検・トラブル等により停止中の原子力発電所の再稼働を行わないこと。

(3) 子どもたちを直ちに、国の責任において避難・疎開させること。また、すでに避難し、またはこれから避難する住民に完全な補償を行うこと。

(4) 原発立地自治体を補助金漬けにし、自立を妨げる原因となっている電源三法(電源開発促進税法、

電源開発促進対策特別会計法、発電用施設周辺地域整備法)を廃止すること。

「原発がなくなれば電力は足りなくなる」「原発電

力は安い」「原発は絶対に安全」といったこれまで吹聴されてきたことが、悉くウソであったことは周知の事実になりました。原発を続けられない理由ならいくらでもあげることができそうですが、原発を続けたい理由は、もはや「利権」だけだと思います。そんなもの

のために、福島県民は放射能に怯える暮らしを強いられ、家族は分断させられ、地域のコミュニティも破壊されました。ガラスバッジを首から下げて通学する子どもたちの姿に、涙が出てきます。私たち大人は、子どもたち

に対して何とということをしてしまったのかと、自分の力不足が情けなくなりそうです。もういい加減、エネルギー政策の方向転換をする時です。「原発はもう止めて」「子どもたちを避難

させて」という私たちの要請に、どのような回答が来るのか、とても楽しみにしています。最終日にはデモ行進を行いました。日比谷公園を出発して、東京電力本社前、銀座数寄屋橋交差点、東京駅と約1時間の行進でした。

参加者は約1000人、「福島の女たち」を先頭に長い隊列が続きました。ゴール地点の常盤公園でデモ隊を迎えながら、「福島の女たち」は泣いていました。つながりあうことのうれしさに泣きました。その後、経産省前に戻って、毛糸ロープによる取り囲みに挑戦。3日間、女たちが指編みでつなげたロープは、

見事に経産省を取り囲むことに成功しました。ラストは、再び日比谷公園に戻ってファイナル集会。笑って、泣いて、叫んで、歌って、

その場にいた全員が一つにつながって、「原発のない未来」を夢見ました。素晴らしいエンディングでした。

これからがまたスタート

今回、人生初の座り込みアクションに参画できて、本当によかったと思っています。一人の力、一人の声は小さいけれど、集まれば大きな力、大きな声にできることを実感できました。また、東京のサポート隊のみなさまをはじめとする、全国のみなさまの温かいご支援に、物心ともに支えられました。頂いたカンパを使って、郡山市から霞が関まで貸切バスを2回走らせることもできました。

座り込みをしている傍を、無表情・無関心で足早に通り過ぎる人もたくさんいました。意思表示をする勇氣と自由を持たないだけで、心の中では「原発はもういらぬ」と感じているに違いないと思います。いつかきっと仲間になれると信じています。

ここからまたスタートです。わたしたちのアクションは、原発をすべて廃炉にするまで終わりません。それまでは決して諦めません。参加者のみなさま、支援者のみなさま、ありがとうございました。また会いましょう。(ひとみ・やよい)「原発いらない福島の女たち」世話人。写真提供も)

「原発いらない福島の女たち」公式ブログ
<http://onnal00nin.seesaa.net/>
 メールアドレス onnal00nin@yahoo.co.jp

のら
運動か
現場
運現

雨にもマケズ、1300人の熱い「人間の鎖」で
経産省の完全包囲に成功!

杉原 浩司



2011年11月11日は「経産省包囲記念日」
—9月11日の成功に続き、経産省・保安院
は「再稼働反対」を掲げる約1300人の「人
間の鎖」によって再び包囲されました。冷た
い雨が降る悪条件の中、これほどの参加が得
られるとは思いませんでした。人々の自主的
参加が頼みであるがゆえに、その心意気がじ
かに伝わってきました。

数日前、JR新橋駅から歩いて「経産省前
テントひろば」(経産省敷地内に9月11日に開設)
に向かう夕方の道すがら、本当にこの場所を
取り囲めるのだろうか、とその姿がなかなか
想像できませんでした。人だけではつなげ
られない事態を想定して、
横断幕をたくさん用意
したり、ペンライトを
吊るしたひもをつなご
うという提案が出たり
もしました。

当日午後4時を過ぎ
ると、雨にもマケズ、
霞ヶ関一帯に向かつて
事前情宣隊が次々と出
発。テント前にも徐々
に人が増えていきまし

た。今回は平日のため、経産省ビルの窓は夕
方も煌々と輝いていました。「窓の向こうに
職員がいる」。切迫感が違います。

いよいよ集会がスタート。経産省正門真
ん前の絶好の位置に横付けした宣伝カーで
は、山口幸夫さん(原子力資料情報室 共同代表)、
木村結さん(原発いらぬ全国の女たちのアク
ション)、笠井亮衆院議員(共産党)、山本太郎
さん(俳優)、服部良一衆院議員(社民党)、吉
田明子さん(YouTuber/原発輸出反対緊急国際
署名)、山城保男さん(横須賀市議/原子力空母
反対運動)から力強い訴えが続きました。最
後に、「制服向上委員会」が「原発さえなけ
れば」「ダッ、ダッ、脱原発の歌」を熱唱し
ました。

要請書(実行委員会のもの、福島、佐賀、福岡、
四国から届いたもの)を大臣官房に向向いて提
出した仲間によると、ロビーで待たされた時
に、外の人々がよく見えたそうです。

午後7時過ぎと7時25分には一斉に手をつ
なぎ「人間の鎖」による完全包囲を達成。前
回の教訓(正面以外にはステージの音が届かな
かった)を生かして、各面ごとに集会も行い
ました。
玄海原発4号機の強引な再稼働、ベトナム

ムへの原発輸出の加速、「避難させずに除染」
キャンペーンなどの「原子力ムラ」による逆
襲に対する「黙っていられない」との思いが、
人々を突き動かしたことは間違いありません。
同時に、若者たちのハリスト、テントひろ
ばの脱原発拠点としての発展、そして「福島
の女たち」「全国の女たち」による座り込み
の成功という、この間の経産省前でのアク
ションの高揚が「人間の鎖」成功の下地を作っ
たとも言えるでしょう。

翌日12日、経産省は報復するかのよう
に、テントひろばを一方的に鎖で囲う動きに出ま
した。冷たく無機質な抑圧の鎖です。手の温
もりをつないだ前日の「人間の鎖」と何と対
照的でしょうか。「国有地」という公共空間
を不当に占拠しているのは経産省の側です。

実行委員会はテントひろばと共に、11・11
から12・11にかけてを「再稼働反対アクション
月間@経産省前テント」として、様々なア
クションを募集します。経産省と右翼、警察
が一体となって強まるテントへの攻撃をはね
返す意味も込めて。最終日の12・11デモへの
多くの皆さんの参加を呼びかけます。
(すぎはら・こうじ/福島原発事故緊急会議、みど
りの未来)

12月11日(日) デモ
13時日比谷公園に集合 14時デモ出発
【主催】11・11と12・11再稼働反対! 全国ア
クション実行委員会 (<http://nonukes.jp/>)

「君が代」不起立最高裁判決の問題性

渡辺 厚子



12・12弁論通知

最高裁は10月6日、「日の丸・君が代」04年処分取消訴訟に対し、弁論期日12月12日を指定してきた。私を含む不当処分撤回を求める被処分者168名は、3・10東京高裁勝訴判決を得ている（戒告・減給処分取消）。弁論を開くとは、その逆判決になる可能性が高いということだ。一、二審とも敗訴している別の訴訟に対しても弁論通知があることとあわせると、どうやら最高裁は、裁量権論上で、停職処分のみ取り消す、という線引きを結論したように思える。今後の裁判、政治動向を左右する重大な判断に注目目である。

最高裁判決

5月から約1ヵ月半の間に、11件もの訴訟が棄却された。

判決は二段構造論法をとっている。

起立斉唱行為は儀礼的所作に過ぎず、思想良心の自由を侵すものではない。職務命令はこの行為を命じたに過ぎず、思想弾圧、転向強要、思想表明強制いずれでもない。従って職務命令は憲法19条（思想及び良心の自由）違反ではない。

他方、起立斉唱行為には敬愛要素が含まれるため、原告らにとって、行為は自らの歴史観等に反し、苦痛・葛藤を生じさせた。原告らにとって、職務命令は、思想良心の自由への間接的制約にあたる。

しかし原告らは全体の奉仕者であり、上司の命令に従う立場にある。儀式の円滑進行、秩序維持をすべき職の公共性がある。

比較考量すると、儀式、秩序維持には必要性、合理性があり、間接的制約は許される。従って職務命令は19条違反ではない。

間接的制約を認めさせ、2名の反対意見、補足意見中5名の処分慎重論を引き出したことは闘いの成果であるが、基本的憲法論において極めて不当な判決であった。

判決の問題性

私は判決には大きく四つの問題があると考える。

(1) 起立斉唱は儀礼的所作である、と多数派同調を求め、「日の丸・君が代」の歴史性を捨象させようとしていること。天皇、日本、日本人の植民地、戦争、戦後責任に目をつぶらせ、無価値を装い、天皇制、国家権力への敬愛価値刷り込みに大きく加担している。

(2) 戦前の思想弾圧の反省から設けられた19条は、精神的自由の砦にもかかわらず、厳格審査すら行なわなかった。必要性、合理性という曖昧な比較考量で決着させ、憲法価値を投げ捨てた。

(3) 教育労働者に対し、全体の奉仕者、職の公共性という名で、職務命令絶対体制をしき、戦前の特別権力関係論の復調を促している。

(4) 起立斉唱行為とは、職務として為すべき子どもたちへの「指導」「垂範」であるとし、不起立行為は、「日の丸・君が代」への敬愛を学ぶべき子どもたちの学習権を阻害すると倒錯論理を打ち出す。思想良心の保護どころか、多民族、多文化社会を認めず、日本国家のための教育、教員、子どもであるべきと臆面もなく国家主義を推進する。

本年7月、国連自由権規約委員会は、同規約19条（意見と表現の自由）「一般的意見34」の最終版を確定、パラグラフ38で、「旗やシンボルに対して敬意を払わないことに関する法令への懸念」をはじめて表明した。

この闘いを広げ、各々が自らの当事者性をもって共に闘いうる闘い、歴史責任、国家と個人の根源的関係に迫る質を内包した闘いを模索し、新自由主義国家主義を推進する政治屋や裁判所から勝利をもぎ取りたい。

（わたなべ・あつこ）元特別支援学校教員、「良心・表現の自由を！」声をあげる市民の会

のら
運動場
運現

「ここから裁判」再び勝訴

洪美珍



東京高裁の勝訴判決

9月16日、七生養護学校「こころとからだの学習」事件の東京高等裁判所判決がありました。約80名の傍聴席は、満席で抽選にはずれて入廷できない人も多数いました。3人の裁判官が入廷し、緊張の中、裁判長が「本件各控訴をいずれも棄却する」と短い主文を読みました。閉廷となりました。「棄却」と聞いたときには勝ったのか、全然わかりませんが、1審が維持され、高裁でも私たち原告が勝ったのです。



東京高裁前の若手弁護士

不当な介入と教育現場の萎縮

事件は2003年のことでした。都立七生養護学校の性教育が行き過ぎていると都議会でも取り上げられ、3人の都議会議員が指導主事などを連れて学校へやってきて、教材を持

ち去りました。そして校長を平の教員に降格し、教員を大量処分しました。このことは学校現場に大きな萎縮効果をもたらし、その後、卒業式・入学式での「君が代・日の丸」強制に関して、ものを言えない雰囲気を作り出していくのに、大きな役割を果たしました。

どの子にも個性があり、一人ひとりに違いがあります。障がいのある子どもたちはより一層それが顕著です。七生養護では、丁寧に子どもたちのニーズに教員たちが応えていたと思います。200人弱の生徒たちの半数は隣接する福祉施設から通う子どもたちです。中には虐待にあった子どもたちも多くいて、知的ハンディと両方で問題は山積みでした。子どもたちの心を開かせ、心に寄り添う手段として様々な工夫がなされ、それが「性教育」の中に取り入れられました。良い香りのお風呂



真ん中でマイクを持つ原告団長

に入る、足湯でマッサージをする、そんなほつとするひと時を過ごすことで、大人への信頼を取り戻した子どもたちもいました。ふだんは乱暴だった男の子でも、赤ちゃん人形を抱くときにはそっと大事に抱えます。そのしぐさを思い出すと、今でもおかしくなります。

教員の創意工夫を奪つ命令は違法

裁判所は、障害児教育においては繰り返し、具体的に教えることが大事だと、現場の裁量を広く認めてくれました。判決では、「教育委員会は、…国の定めた法令及び大綱的基準（学習指導要領）の枠の中において、…より細目にわたる基準を設定し、一般的な指示を与え、指導、助言を行なうとともに、特に必要な場合には具体的な命令を発することができるが、教員の創意工夫の余地を奪うような細目にまでわたる指示命令等を行なうことまでは許されない」とあります。性教育に関しては、まだ価値観が定まっていないものなのだから、多様な解釈が可能であると述べています。

今、教育現場は上意下達が進透し、窒息しそうです。子どもたちの学びが保障されないような現状になっていることをとても危惧しています。七生の勝利判決を広めて行くことが次の課題だと思っています。

(こう・びちん／七生養護学校・元保護者、写真提供)

わだつみ記念館の特別展 「中国との戦争と戦没学生」

高橋 武智

東京本郷のわだつみのこえ記念館は、戦没学生を中心に広く戦争犠牲者の遺稿・遺品などの現物を展示することで、わだつみの悲劇を繰り返させないための活動をしてきたが、開館5周年にあたり、10月24日から11月4日まで標記のような特別展を開いた。「先の大戦」という空虚な政府呼称の中心にあるはずの実像に迫ろうと、テーマに（太平洋戦争でなく）あえて中国との戦争を掲げた。

幸い館が保管する遺稿のなかに、中国戦線での生々しい体験を、評価を交えず書き綴ったものがあり、それを「討伐と中国軍の抵抗」「毒ガス」「中国軍捕虜の取り扱い」「中国・中国人観」などの視点から、丁寧に読み解くことで、戦争の実態と兵士の心情に同時に迫ろうとした。

また、中国戦線に行くには若すぎた（しかしのちに戦没者となった）中高大学生の手記も同時

に分析・展示し、「銃後」からの時局観の変遷をあわせとらえてみた。ここでの小テーマとしては「戦争目的」「国内体制の革新」「右翼学生運動への反発」などがあり、最後の「自由と個性の尊重」にいたって『きけわだつみのこえ』の主調音に近くなる。

いうまでもなく、日本戦没学生の手記『きけわだつみのこえ』はすでに古典の地位を占めており、最近はそのミュージカル化まで

実現したが、書中には戦場記録は比較的少なく、また数多くの手記からの抜粋にあたり、編者は思想性・抽象性に偏った選択をせざるをえなかった面がある。今回の催しは、学生というより兵士の視点に身を寄せて体験↓記録↓戦争観の往復運動を可能にすることにより、『きけわだつみのこえ』の読みとり方にも示唆を与えるものになったと自負している。

展示と並んで、亀井文夫編集の『上海―支那事変後方記録』（1938）のビデオ上映やそれぞれ専門の研究者を囲む「中国から見た日中戦争」（石島紀之さん）と「日中戦争と学徒兵の短歌」（水野昌雄さん）という二つのフォーラムも開いた。

これらのイベントも、展示自体も、主催者の想像をはるかに越え、延べ人数370名の来館者を迎えることができた。死者を悼むという祈りの側面だけでなく、その死者の生の意味を歴史的にとらえ直すというニーズもまた、今の日本に確かに存在していることが納得できた。

展示ケースのなかの、達筆で書かれた細かい遺稿を見るのは得難い機会だったが、読みやすさを考え、その全文を活字化した「解説書」を編集した（頒価300円）。フォーラムの記録はわだつみ会機関誌「わだつみのこえ」の来月号に掲載される予定。

遺稿の読みこみは学芸員の努力の賜物だが、フォーラムの運営などは、記念館の現スタッフより数世代若い有志の手に委ねることができた。体験の伝・継承とよくいうが、その担い手もまた伝・継承されはじめたのは嬉しい。11月5日からは常設展にもどり、開館は月水金の午後になった。お問い合わせは「Tel」Faxは03-3815-8571 #6。

（たかはし・たけとも／本誌編集委員、わだつみのこえ記念館長）



写真・石井力さん

フクシマ・ダイイチの電力で 快適な暮らしをしてきた方々への手紙

秋山 豊寛

拝啓

秋が深まってきましたが、お変わりありませんか。小生、難民、暮らしの割には、「すこぶる」つきの元氣一杯です。

阿武隈の山中にいた時は、10月の末には稲架に下げた稲束を見て「今年も何とかコメが確保できた」とこみ上げてくる喜びを噛みしめ、至福感を味わっていたものです。

今年は、疎開先の友人の田で稲を育てましたが、天日干しをしているうちに北風に乗ってやってくる放射性微粒子に汚染される可能性があるので、ハーベスターで一気に刈り入れを済ませました。黄金色の稲束が太陽の光を浴びて、何とも良い匂いを出すのを楽しめなかつたのは、何とも淋しい収穫の秋です。

「原発難民」といつても、事故を起こしたフクシマ・ダイイチから32キロ地点で暮らしただけで、お上の指示で「難民」暮らしを選んだわけでもなく、放射線被曝の脅威に怯えての自主避難の身。憎しみと怒りを研ぎ澄ます毎日です。

「善意」が真実を隠してしまふことがあります。その一つが、一時、盛り上がるかという雰囲気もあった「フクシマ産の農産物を

食べよう」といった「キャンペーン」。

政府が設定した「規制値」以下だから「大丈夫」という理屈らしいのですが、政府設定の「規制値」そのものがイカガワシイとは考えないのでしょうか。農林水産省は7月の末に、東日本17都県の牧草が汚染されている可能性があるので、牛たちにエサとして「食べさせないように」という指示を出しています。放射能に汚染された稲ワラを食べた牛の肉が出回っていることで、メディアが大騒ぎしていた頃の話です。この牛の糞尿を原料とする「堆肥」生産も、自粛するように」という指示も出ています。これは、要するに関東以北は、放射能汚染地帯であることを農水省が認識しているということではないでしょうか。

魚についても、同じ認識なのかどうか知りませんが、東京電力が事故当時、海に放出した放射性物質の入った水の汚染について、フランスは東電の発表より30倍の量と言っています。近海魚は、本当に安心して食べられるのでしょうか。

先日、ある農家の人から「放射能を消してしまう化学物質って、ないんですかね」と聞かれて、「それが無いから、放射性物質」は

恐いんですよ」としか答えられませんでした。メディアがようやく内部被曝の脅威について報じ始めましたが、なかなか、そうした情報・知識が現場の農家にまで浸透するには時間がかりそうです。

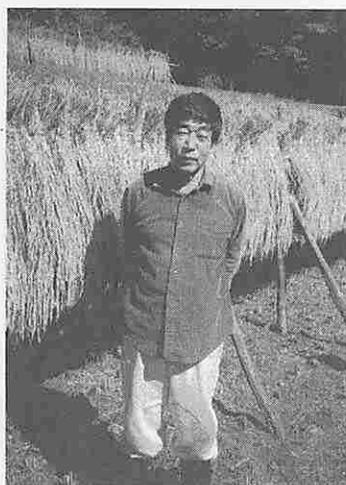
恐らく「フクシマの農産物を買って、フクシマの生産者を応援したい」という善意の人々は、「内部被曝」の脅威については、あまり考えたことはないのかもしれませんが、食を通じて放射性物質が日本各地に広がれば、下水を通じて日本近海も汚染されます。

「脱原発」を実現する上では、この低線量の放射性物質による内部被曝の問題を正しく知ることが基本でしょう。

放射性物質が低い線量であっても、生命体に「突然変異」を起こさせる、つまり遺伝子が影響を受けることは、すでに1920年代から知られていたことです。健康診断でレントゲン検査を受ける時、「念のため」といって腹のまわりに何か巻きつけてX線を浴びさせられた記憶がありますが、あの「腰巻」も何千何万という白血球や放射線障害の子供たちの犠牲の上に始められたわけです。

「ベクレル」なんてカタカナを、善意の人々も口にするようになったのは、実に今年の3月11日以降のことです。この「ベクレル」は放射線の研究家の名前。キューリーさんと同じく、最後には放射線を浴び過ぎたことが原因で死亡しているそうです。

埼玉大学の教授だった市川定夫先生の「新



福架の前で筆者（2010年秋、筆者提供）

環境学Ⅲ」（藤原書店）に詳しいのですが、普通の一般の人びとが放射線を低線量なら浴びても「心配ない」という「悪魔のメッセージ」が、現在の核兵器そして原子力発電を推進する立場の人々が「死守」したい「原則」です。「規制値」以下であっても、放射性物質入りの農産物を身体に入れることは、自ら「ヒバクシャ」になる道に通じる行為です。もちろん、フクシマに暮らす人びとと寄り添うという倫理観から、自らヒバクシャの中に入りたいと言う人びとがいた場合、他の者がアレコレ言うのは失礼かもしれません。しかし、その好意が放射性物質を拡散させていることに気がついていなければ、単なる無知です。また、その結果、免疫力を弱め病にかかり、医者世話になることがあれば、それは医療費増大に力を貸していることにもなるわけです。さらに「規制値以下なら大丈夫キャンペーン」に、結果的には組することにもなり、「大丈夫ではない」と闘っている人びとに敵対することにもなります。

それじゃあ「農家はどうすれば」と言う人も出てくるでしょう。

一言で言えば「ストライキ」です。危険な地域では働けない。東京電力が完全に除染するまでは働かない。休業補償をしろ。という闘いを組織することです。善意が本物であれば、こうした声を支援すべきです。こうした声を支援するのが、これまで迷惑施設をフクシマ住民に押しつけて「快適な暮らし」をしてきた大都市住民の責任です。

「汚染されない土地」を日本のどこかで捜して「移住させろ」と要求することも重要です。一人また一人とバラバラに地域を離れることに抵抗感のある人も少なくないでしょう。だとすれば、地域ごと、そっくりの移住です。大熊町、双葉町という「原発の町」がキレイに除染されるのは、恐らく数十年後ひょっとすると数百年後でしょう。この人々は、集団で移住するか、バラバラに移住するか、いずれにしろ、どこかで「決断」しなければならぬ時は来るはずで、全住民健康調査などで人間モルモットにされるのは拒否すべきです。アメリカのビキニ核実験のあと、環境に暮らした人々がどのように扱われ苦難の道をたどったのか、学習すればわかることです。

集団移住は「現実的ではない」と言う人がいたら、訊ねたい。「犠牲者を出さずに住民の手による除染は可能ですか」「東電・政府はすぐに完全に除染できますか」と。

福島県は「放射線量を低減」する意志のあ

る地域には、50万円を限度に「補助」するという提案を県内の自治体に出しています。市町村は、それを各行政区長におろしています。これなどは、放射性物質を放出させた東京電力の責任を曖昧にする行為です。

「金がないから」と言うのは、聞こえない話です。問題のスリカエです。

迷惑施設を地方に押しつけてきた大都市の住民も、今回の事故の経費を負担すべきです。東京電力の料金を大幅に値上げしてでも、除染の費用は負担すべきなのです。

勘違いしないでほしいことがあります。原発難民にとつて必要なのは、被災者に寄り添う。癒し。などという大都市住民の甘い自己満足ではありません。現状回復です。失われた森を、失われた海を、元に戻せ。なのです。恐らく、大都市の住民は、クリスマス・ソングとともに、日常の世界に戻りつつあるのではと推察します。しかし、その「日常」が呪われたものであることは、忘れないでいただきたいと思えます。

敬具

10月31日

（あきやま・とよひろ／農民、ジャーナリスト。元TBSワシントン支局長。90年日本人初の宇宙飛行士として旧ソ連「ソユーズ」「ミール」に乗り9日間飛行。95年TBS退社、福島県滝根町に移住、有機農業に従事したが、現在「原発難民」として群馬県鬼石町に疎開中。著書「鉄と宇宙船」「宇宙と大地」など）

「3・11以後」の「レスキュー」・「防災」の論じ方 —〈原点〉としての九条「絶対」平和主義—をふまえて

天野 恵一

〔3・11〕直後に、私は小田実の「被災の思想・難死の思想」（朝日新聞社、1996年）を倒れた棚の下に山積みになった本の中から探し出して、初めて読んでみた。この1995年1月17日火曜日未明（午前5時46分）の「阪神」地帯を中心のあの大地震の時の状況から書き出されている本に、私はグングン引き込まれ強い共感を持って一気に読み終えた。私は小田のいい読者ではない。この「ベ平連」イデオログであった彼の仕事を愛読者として追いかけて読んできた、などということは全くなかった。それでも、何冊かは読んでこなかったわけではないし、「散華」の思想（死）に、自分の大阪大空襲の下を、黒焦げの死体の中を逃げまわった「難死」の思想（体験）をこそ対置した、彼のユニークな思想（これが小田の「平和論のベースにあるもの）を知らなかったわけではない。

しかし、この怒りをあらわにし、ストレートにこの「開発」の「人災」を生み出した御用学者・マスコミ・資本（主に「土建」）そして行政（政府）への具体的批判をぶち続け、「復興」というかけ声とともに始まった、まったく反省のない新たな「開発」政策と、それと表裏一体で対応する、被災者の切り捨てでしかない「棄民」政策、この現在進行する事態を追いかけながら、鋭く批判的に切りこみ続ける言葉。小田はその過程で、「開発」の戦後（社会）史をトータルに批判する必要をこそ突き出し、いろいろなテーマで問われている運動の中にも、この震災が露出させた大問題を組み込み考えざるべきだと主張し、それができていない多様な「市民運動」へのいらだちも隠そうとしていない。

私は1995年、一人の被災者として小田が発した切実なアピールに、自分の担っている運動の忙しさにかまけて、かつてキチンと受け止めようとしなかったことを思い、恥じた。と同時に、小田の言葉は〔3・11〕以後進行する事態にそのまま重なる響き、その進行する事態に対する私の「怒り」と共振し続けたのである。私は、こんなふうに小田の著作一冊まるごと強く共感し続けて読み終える、などということを経験しようとは思ってこなかった。自分でも驚いてしまった。もちろん、「原発」が放射能をたれ流し

被災の思想

小田実



難死の思想

続けているいま、いつ終わるのかわからない現在にまで続いている恐ろしい事態は、1995

年の小田を被災者にした事態にはなかった。その点は、現状の方がはるかに過酷であるといえよう。しかし、基本的な問題にすべきことは、この本ですべて提起されている。そう考えることができる「難死」と「被災」体験を、そして「市民運動」の戦後をこそ生き抜いた小田ならではの力作である。

私は、読み終わりこう思った。ひどく遅れてしまったが、ここの小田のアピール（提言）をこそ、〔3・11〕以後の運動の中でキチンと受けとめよう、そう決意した。

自衛隊史上空前のスピーディーで大規模な災害派遣——本誌前々号（127号）8月1日発行）の前田哲夫のいう「三自衛隊初の10万人体制」その「100日余わたる編成」（「必殺」でなく「必救」の組織へ）の結果、うみだされた被災者の感謝の言葉がマスコミにあふれ、軍隊の日本社会の中での市民権がより強固になるといって、私たち反軍・反安保運動を担ってきた運動にとって、ピンチな状況がより深化・拡大してきていることを、ヒシヒシと実感せざるを得なくなった状況を前にし、私は、以下のごとき小田の言葉をあらためて想起した。

「すべてのことは原点に立ち戻って考えるべきときに来ているように見える。自衛隊は、たとえ、それがどのような目的によるものであろうと、戦争をするためにつくられた軍事組織、軍事集団であって、そもそも救助・救援のためにつくられた救援組織・救援集団ではない。救助、救援はそのこと自体を目的とした『制度』、さらには『空気』を入れての態勢をつくり出していることだ。そのために、労力も金もかける——これが『防災』の原点だ。そして、救助、救援の原点はまず人間のいのちと生活の安全の確保、そこから考えるのが『防災』都市計画の原点。原点は高層、超高層の建物の建築、高速道路の建設、まして人口島の空港の造成などにあるのではない。／ことのふり幅をもうすこし押し広げて言えば、『平和憲法』の原点は『絶対』平和主義、その具現としての『第九条』。そこでの原点はいかなる軍事組織、軍事集団をもたないことだ。その原点を否定しては、もはや『平和憲法』は『平和憲法』ではない。災害時に自衛隊に頼ることはその原点を離れることだろう。逆に、自衛隊に頼らない、『市民の防災』態勢を被災の体験、『被災の思想』に基づいてつくりだすことは、その原点にしっかりと立つことだ」（傍線引用者）。

私は災害時に自衛隊に頼らざるをえない不幸な事態から、一日でも早く脱出しなければ、の思いのこもった、小田のメッセージをふまえて、今度こそ、住民の「命と安全」をべー

捜索活動をする迷彩服の自衛隊員（陸上自衛隊 HP より）



スにした住民が主体の「被災の思想」の実現としての、救助・防災組織に向けた積極的な論議を「平和運動」の諸グループが起こしていくべきだと思いたち、背伸びは承知で「新しい災害救助隊・非軍事の防災体制づくり」に向けて討論を開始しよう！——反戦・反軍運動の自覚的課題として」（季刊ビーブルズ・プラン」54号）を書いた。

論議はすでに始まっている。本誌前号（128号10月1日発行）の「自衛隊を災害救助隊へ」で非核市民運動・ヨコスカの新倉裕史は、自衛隊を災害救助隊へシフトさせる運動の必要を力説している。「自衛隊が9条に帰る道↓災害救助隊」へというコースへの運動なくして、ただ「出動」を批判する運動では人びとの「信頼」は得られないだろうと論じている。また、先に触れた前々号の論文で前田は「『9条堅持至上』から脱した自衛隊活用策——

『最初の72時間』に即応したハイパーレスキュー能力を部隊編成・装備・訓練の面に反映させた

組織への改編——が考えられなければならない」と新倉らと同じ方向の主張を展開している。また、さすがに軍事問題一筋の専門家前田ならではの自由闊達な筆のはこびで自衛隊の歴史をその実態と運用（法制度とその解釈をも含めて）をあれこれの実例をちりばめて平明に論じた『自衛隊のジレンマ——3・11震災後の分水嶺』（現代書館）のラストで、その構成はより具体的に示されている。

残念ながら、私はこういう方向（プラン）に賛成することはできない。

それは小田のいう（原点）から離れてしまふ方向であるから。おそらく、このピンチの状況をうまく逆手に取ってチャンスにつくりかえようという気持が、こういう方向の提案を生み出すのであろうが、この軍隊の中のレスキュー隊を強化していこうという動きは、今までつみあげてきた災害派遣の経験をよりふまえ、軍隊のままに災害派遣の体制を強化していこうという、海外派兵も日常化しただしい現在の自衛隊そのものの「防災」の「治安」化・「軍事」化の強化）動きに、飲み込まれてしまうものにすぎないと思われるからである。「必救」の組織を「必殺」の組織の内側に作ることは不可能だ。それは「必殺」の外に、どんなに困難でも国家の軍人が主役でなく、地域住民自身が主役になり、「九条」に「空気」をいれなおす方向でしか、作り出ししようがないもののはずだからである。

（あまの・やすかず／本誌編集委員）

『父たちの「戦場」に暮らす人びと』

ちよつと恥ずかしい「自薦の弁」

加藤 克子

嫌中ムードを吹き飛ばしたい

9月はじめ私は2冊目の本を出した。02年の「日中戦争・哀しい兵隊―父の記憶をたどる旅」(れんが書房新社)に続く本で、『父たちの「戦場」に暮らす人びと―日中の「記憶」を結ぶ旅』(第三書館)である。

書店にはおびただしい「嫌北・嫌中本」が並んでいる。残念でならない。侵略の被害者はその事実をよく覚えて加害者は忘れていくものだ。日本の中国侵略を反省しようという立場は「自虐史観」と非難され、少数派に止まっている。「日本はアメリカだけに負けたのだ」と自ら慰めてきた人びとにとって、発展著しい中国は耐えがたい。さらに不況や社会の閉塞感の直撃を受けている若者たちが「国家主義」や「国益主義」の罫にとらえられていく。

来年は、日中国交回復から40年の節目の年である。この40年、曲がりなりにも日中の経済的な関係は飛躍的に深まった。日本に住む中国人は多いし、中国で働いている日本人も多い。実際の関係と中国認識の不一致は不幸

である。

私が2冊目の本を書いた動機の「不純」な側面はここにあった。「嫌中本」の山の中に「好中本」の一冊を登場させたい。平易な文章、値段も安く……と心がけた。近くの本屋に置いてもらうことになり、いそいそと出かけてみた。「嫌中本」の棚になく、日中戦争研究所の棚にない。やつと探しあてた私の本は「戦記物」の棚に入っていた!

父の戦跡をたどる中国への旅

私がかねてから60歳になったら1年間だけどこか外国で暮らしてみたいと思っていた。60歳になる年の正月に父が急逝した。力が半分抜けたような日々を過ごした。父は歯科医で、日曜画家でもあった。父が計画していた個展や画集発行を代行しながら、認知症が深刻になりつつある母とつきあう課題にも直面した。3年たつて「人生で予定通りに行くことなんかほとんどない。持っている条件の範囲でできることをしよう」と思うようになった。ちよつと国旗・国歌制定の頃だった。反戦運動は思想的危機に直面していた。

2000年5月、私は父の残した『戦場日誌』を手がかりに、9日間の中国への旅にでかけた。

父は1937年、私が生まれて1週間後に召集され、上海・徐州・武漢戦に参戦した。上海上陸1ヵ月後に、所属した百一師団の加納部隊長が戦死した。たまたま伝令に出ていて助かった話を、私はくりかえし「神話」のように聞いて育った。翌年秋の武漢戦では、廬山をめぐる山岳戦で飯塚部隊長が戦死した。旅の目的地を私は内陸部、揚子江中流にある九江の町を南に下った「江西省永修」と決めていた。そこは父たちの部隊、陸軍第百一師団が廬山戦のちにたどりつき、ほぼ3ヵ月間駐留した町である。父たちが駐留した永修とはどんなところだろうか? そこに暮らしているのはどんな人びとだろうか? 上海から南京までは列車、南京から九江までは揚子江上の客船で丸一昼夜、九江から永修までは通訳と車をやとい、百一師団の進路をたどった。5日間かけてたどりついた永修の町で、私はたくさんの中国の人びとに出会う幸運に恵まれた。そこで受けた厚情と生まれた友情が、その後の中国への旅の出発点になった。そして2年後、1冊目の本『日中戦争・哀しい兵隊』が生まれた。

戦場の向こうへの旅を志す

訪れるたびに中国社会はどんどん変貌していく。中国には「上に政策あれば下に対策あ



永修の村人から話を聞く筆者（中央）

り」ということわざがある。人びとは矛盾に満ち、しかし活気ある現代中国を、文字通りしぶとく生きている。知りあった友人たちの暮らしぶり、成長する子どもたち、そして地方の町・永修……。旅を続けるうちに、私はかつて戦場の向こう側を生きた中国の古老の話を聞きたい、と思うようになった。07年、私は最初の旅から第一の理解者になってくれた通訳の朱さんと一緒に、永修近郊の村々をたずね、日中戦争経験者から話を聞く旅をはじめた。

同じころ、本の1冊目に目を止めた方から「あなたのお父さんは私の父と同じ部隊だったのではないか？」と連絡をもらい、元通信兵の桜田さんと知りあった。90歳をこえた桜田さんはまるで娘をむかえるように、そして私は父に会いにでかけるように、訪問がはじまった。戦場のありさまを聞き、そのときど

う思ったかを尋ね、戦争について対話する。桜田さんは私のぶしつけな質問にも率直に答えてくれる方だった。

今回の本を出す動機の「純粋」な側面は、①村人を主体とする中国の戦争体験者の証言を伝える、②この旅に協力してくれた中国の現在を生きたる人びとのことを伝える、③桜田さんの経験を通して、兵士にとつての日中戦争を考える素材を提供する、この3点である。

「自薦」ついでに「これは楽しく読め、タメになる本です」と断言しよう。庶民同士の関係で戦争体験を聞く一種「過激な」試みの記録である。永修の三カ月が、父や桜田さんたち日本軍兵士にとつて、そして戦場の向こう側を生きた中国の村人たちにとつて、どんなものだったのかを、少しは明らかにしている。「三光作戦」と対比して地味な「塩の統制」が、普通の庶民の生活にどんな影響をもったか、占領というものの本質がはからずもうかびあがってくる。

書店で買ってぜひ読んでください

11年7月に98歳の誕生日をむかえる桜田さんに、私は「お誕生日にはできあがった本を持ってきます」と約束した。出版社に断られつづけ、大震災で交渉は中断した。中国の友人から送られてきた「大変だろうが、あなたの本はきつと意義あるものだと思う。がんばって出版にこぎつけるように」という手紙が後押しをしてくれた。誕生日には間に合わ

なかったが約束の半分は果すことができた。

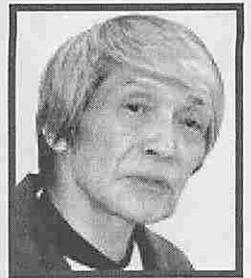
書評もボチボチと始め、その一つで「加藤さんは、復員兵たちの無言の反戦が平和憲法を支えてきたと評価しているが、評価しすぎではないか。平和はそんなに危ういものなのか？」という反論をもらった。評価しすぎている面があるかもしれないと思う。だがその一方で確たる礎のある平和などあるはずがない、とも思う。「平和」とは常に危ういものである。震災後の日本がアジアの人びととどのような関係を結ぶのかは大きな課題だ。「中国脅威論」でいいのか？ それを考えるために、本書が少しは役立つことを願っている。

「私には夢がある」。印税がたくさん入ったら、姉とよび妹とよびあう永修の友の80歳の誕生日祝いを、廬山のホテルを借り切って盛大に持ちたい。

（かとう・かつこ／立川自衛隊監視テント村／写真提供も）



陸軍第百一師団元通信兵桜田薫さんと筆者



故齋藤憐さん 10月12日
死去、享年70歳

元ジャテックの劇作家 齋藤憐の死を悼んで

本野 義雄

1969年、ベトナム戦争が激化する中で、私たちジャテック(注1)の活動は多忙を極めていた。保護を求める脱走米兵は毎週のように現われ、彼らへのインタヴュー、移送手段と人員の確保、ベッドと食事を提供してくれる家庭探しに追われる毎日だった。

知人伝いに、ある演劇青年のグループが参加してくれると聞き、早速連絡を取って会うことにした。場所は多分赤坂の喫茶店だったろう。現われたのはヒヨロリと痩せて背が高く、眼のギョロツとした若者で、笑うと顔中が人なつこく一変するのが印象的だった。後に憐さんが書いた回想記(注2)によれば、当時彼は28歳、後の演出家串田和美・佐藤信両氏と共に「自由劇場」という小劇場を発足させたばかりで、食うや食わずの生活だったようだ。最初に預けたPという脱走兵を連れて行ったのは、新大久保のせまい6畳一間のアパートだった(彼の回想記によれば、そこは串田和美さんの仕事場だったという)。

Pは多くの脱走兵がそうだったように、麻薬中毒者だった。「軍隊を脱走し政治亡命を認めない異国の地に浮遊している彼にとって、

麻薬の罪など国家反逆罪に比べたらいかほどのものであったろう」と憐さんは書いている。

Pは3〜4週間私たちの保護下にあったが、ある日忽然としていなくなってしまった(これも当時よくあるケースだった)。憐さんたちの努力は無駄になったように見えたが、彼は厭な顔も見せず次々に私たちが連れて行く新しい脱走兵の面倒をみてくれた。

ドキュメント・ドラマを夢見て

71年頃から、ジャテックの方針転換(脱走兵保護から反戦米兵支援に重点を移す)もあって、脱走兵関連の仕事は次第に少なくなった。その頃私が引越した西大久保のマンションに、近くに住んでいた憐さんがよく遊びに来て将棋を指した。私が勝つことが多く、その度に彼は口惜しかった。

75年頃だったか、私は勤務先のテレビ局で東南アジアへの日本の経済進出をテーマにした「ドキュメンタリー・ドラマ」を企画し、憐さんに協力を求めた。二人で赤坂の東急ホテルに泊り込み、徹夜して原稿用紙20〜30枚のシノプシス(梗概)を作り上げた。当時の

テレビドラマには例のない斬新な企画だと、二人とも確信していた。

10日ほどして、私は編成局の担当者呼び出された。

「この企画はなかなか面白い」と、彼は度の強い眼鏡越しに言った。「正規の編成会議にかけてもいい。但し、脚本は無名の作家じゃだめだ。〇〇を起用しよう」

彼は、当時売れっ子だったある脚本家の名前をあげた。私は、脚本は新人の齋藤憐でなければ絶対だめだと主張した。話は壊れた。憐さん呼び出し、委細を話して謝った。

「本野さん、われわれは楽しい夢を見ていたんですよ」憐さんは、そう言って一笑した。その数年後、憐さんの『上海バンスキング』が大ヒットし、岸田国士戯曲賞が与えられた。私はあの編成マンを見返してやれたような気がして、嬉しかった。

『となり』に脱走兵がいた時代』の出版

憐さんは花形劇作家になり、私も外国取材が多くなったりして、会う機会が少なくなつた。私は彼にジャテックの活動をテーマにした戯曲を書いてほしかったので、あるパーティで同席したとき、その気はないか尋ねてみたが、答えは否定的だった。その頃の彼は同時に数本の作品を執筆しており、先に渡つて幾つもの予定がたまっているようだった。

90年代半ば、ジャテック運動の詳細な記録を作ろうという計画が軌道に乗り、連絡がと

れる関係者すべてに原稿を依頼した。隣さんも快く応じてくれ、「死ぬのが怖かった若者たち」という素晴らしい文章を寄稿してくれた。編集に2年あまりをかけて出来上がった本は2段組で650ページを越える大冊となり、『となり』に脱走兵がいた時代』という題がつけられた(思想の科学社刊、在庫あり)。隣さんがこの本を熟読して構想を練ったことは確かだ。2000年、彼から『お隣りの脱走兵』という芝居を上演するから協力してほしい、との連絡が入った。願ってもない申し出だった。

『お隣りの脱走兵』という芝居

東京の新興住宅地にある中流家庭檜山家にある日、大学生の一人息子がジャズ喫茶で知り合った白人青年を連れて来る。その青年がベトナム行きから逃げた脱走兵とわかって、一家は大騒ぎ。知り合いのジャズテック活動家と呼んで引き取ってもらおうとするが、ジャズテックもいま手一杯で引き取る余裕がないと言われ、やむなく数日預ることになる。片言の英語まじりで暮らす緊張の日々のうちに、家族は次第に変貌して行く。

隣さんの『お隣りの脱走兵』(而立書房刊、在庫あり)は、喜劇的な場面を縦横に折込みながら、当時私たちが直面した厄介でデリケートな多くの問題を見事に再現している。そればかりか、隣りの電器屋の主人が度々新製品の売り込みに現われる場面を通じて、経

済成長の真只中にあつた当時の世相も描いた。短い台詞によって、国家と市民、歴史と個人の関係についても言及している。

清家 ジャズテックには組織なんてありません。純一 組織がない？

清家 強いて言えば、あなたがジャズテックです。

純一(飛び上がった) ええ、私が? 入会して

いない私がどうしてジャズテックなんだ?

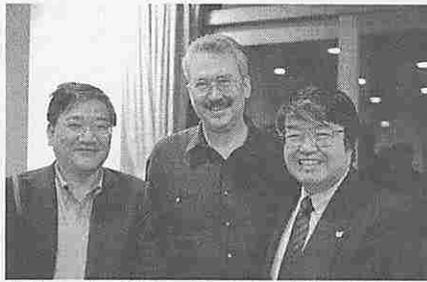
清家 ジャズテックには会員名簿も規約もあります。脱走兵と関わりを持った者がジャズテックです。

このやりとりが観客に与えた驚きの効果を、今もはつきりと思い出す。これこそは、私たちが当時主張していた運動原理だった。

舞台から元脱走兵が挨拶

高橋武智と私

は度々稽古場に足を運び、体験者として出演者やスタッフの質問に答えたり、意見を述べたりした。それ以上に私たちができた貢献は、隣さんの依頼に応え



歓迎パーティでのJ・F・ロウ(中央、2001年6月18日撮影・巨島聡)

て米国から生身の元脱走兵を呼び寄せたことだろう。

当時来栖というコード名で呼ばれていたジョン・フィリップ・ロウは、2年間ジャズテックの保護下におかれた後、偽造パスポートによる非合法出国者第1号として70年、パリに脱出(注3)。4年後恩赦により故国に帰り、医学を学んで医師になった。日本の土を踏むのは30年ぶり、何十人ものかつてのジャズテックのメンバーとさまざまな感動的な再会があった。01年6月、紀伊国屋ホールでの『お隣りの脱走兵』公演初日と2日目、彼はカーテンコールに登場して舞台から「私が当時の脱走兵です」と挨拶した。それまで舞台上のお芝居と思っていた観客に、それが現実にあったことなのだという実感を与えたのである。(来栖の再来日と歓迎パーティの様子は当時の朝日新聞にも大きく報じられた)。

隣さんはその後も多くの戯曲を書き、数々の受賞に輝いた。元ジャズテック同志として、心からご冥福を祈る。合掌。

(もとの・よしお/本誌編集委員)

【注1】ベ平連運動の一環として67〜75年に展開された、市民による反戦脱走米兵援助運動。

【注2】「死ぬのが怖かった若者たち」、思想の科学社刊『となり』に脱走兵がいた時代』所収。

【注3】高橋武智「私たちは、脱走アメリカ兵を越境させた——ベ平連/ジャズテック、最後の密出国作戦の回想」(作品社刊、2007年、在庫あり)に詳しい。



ピープルズ・プラン研究所運営委員の武藤さん(写真向かって左)と本会共同代表の吉川さん。二人が今年共に80歳を迎えられたことを祝う会が、10月29日、東京で開かれました。ベ平連運動をもとにしたがら、若いころは顔を合わせると大喧嘩になったというお二人、久しぶりの対談の一端をご紹介します。

学生時代の出会い

武藤 二人の交流史ということだけど、出会った時は19歳と20歳。学年は吉川さんのほうが一つ上だった。僕は人の誕生日はぜんぜん覚えないうだけけど、吉川さんの誕生日は知ってるんです。1931年の3月14日。1954年の3月14日に、全学連など活動家が大勢捕まる事件があつて、僕も吉川君も警視庁に留置される。そこで、岩間っていう公

安刑事にねちねち取調べられるんですが、この刑事が、理論闘争のつもりか、ロシア革命が起ったときマルクスはそんなはずないと驚いたそうじゃないか、などと言った。ロシア革命の1917年、マルクスはとくに死んでいる。というわけで、岩間氏の理論闘争は成功しなかった。それがあつたので、後でマルクスの命日をしたらそれが何と3月14日。で、よけい吉川誕生日は忘れられぬ日になりました。僕が大学に入った1950年は朝鮮戦争前夜の感じがキャンパスにみまぎっていた。僕は高校では一時右翼を張つてたけれど、理屈好きの唯物論者の友達との論争に負けて、転向しかかっていました。でも、大学に入学して、心理学研究会に入ろうと部屋を覗いてみると、ねずみばかり扱つていて人間がなくて、面白くない、そこで社会学研究会を作ろうと張り紙をしたら、現れたのが吉川さんだった。もう一人は、富永健一。この人は東大の社会学の教授になりました。吉川さんは当時日本文化研究会に属していて、すごい趣味人。謡いもお茶もできる。落語の「じゅげむじゅげむごころのすりきれ・・・」を最後まで言える。もう言えない？

吉川 言えるよ。

武藤 まったく私の文化とはちがうんで驚異的だったですね。正月には和服で床の間の前に正座して写真撮るような人でした。1953年に朝鮮戦争が終わり、1954年ごろから社会の雰囲気占領が終わつてほつ

としたような感じになつていったと思います。50年代のことは、証言者が年々少なくなつてしまうのに、まだちゃんと研究されていないですね。1951年に共産党は、日本は農地改革は見せかけで、封建遺制が支配しているといった奇妙な綱領をきめて、山林地主が支配している山村から武装闘争をするとして、山村工作隊を組織した。僕はそれには入らなかつたけれど、この綱領を実証するためとして組織された農村調査に加わつた。吉川さんも富永さんも加わつた。50年の12月末。三多摩の山村。一夜は小学校の体育館で寝ましたが、猛烈に寒い。積んであつた古畳を掛け布団代わりにしたけど、重くて寝られない。これはいつたい政治運動なのか冒険クラブなのかわからないといった感じでした。僕らは非常に不毛な時代に知り合つた。そのあと不毛でない時代、活動にやりがいのある時代もありました。吉川さんにはそれはベ平連の時代ですね。

ベ平連の前に僕は平和委員会にいた吉川さんと一緒に仕事をしています。僕は原水協の国際部について、何回も原水禁世界大会と一緒にやりました。しかしその後、中ソ論争がらみの内部対立が起り、運動は荒れに荒れます。その中で、ついに吉川さんは堂々たる抗議声明を出して平和委員会をやめるんですね。僕はその声明を英語に翻訳して世界中にばらまくお手伝いをしました。

こうして60年たち、いま並んで座るのは、

ほんとうに不思議な縁ですね。吉川さんといつていいのか、吉川君といつていいのか、おい吉川、というのか、いまだによくわからぬ、そういう不思議な関係であります。

運動は「失敗」だったのだろうか

僕は1950年代、日本の反体制の民衆運動が大きい敗北を喫して、それが60年後の今も縛っていることを痛感しています。対米関係です。サンフランシスコ講和と安保条約への反対運動は実を結ばなかった。僕は「国恥記念日」と銘打った52年4月28日、全都学生総決起大会で、来なかった議長の後継者に議長をやった。それもあって僕は退学処分になりました。あれから60年近くたつが、僕は今日の日米関係はそこで決まってしまったと思う。全面講和を要求する運動はかなり広汎に広がったが、腰砕けになった。民衆運動の政治的な力量というものがどんなに大切か、それを思い知りました。それは原発・沖繩・TPPという社会全体の選択を要求する課題に向き合ういまも、あらためて考える必要があると思うんですね。

戦後期に、モスクワの言う通りにしないユーゴスラビアのチトーは、スターリンに徹底的に狙われて、帝国主義に奉仕する裏切り者といわれ、ものすごい圧力をかけられたが、断固として立ち向かうことができた。それは政治力です。チトーがもっていた力、民衆の支持を背後にもつ政治力ですよね。

アメリカの支配も宿命的だったとは考えるべきではない。でも当時、ユーゴに匹敵する政治の力、すなわち民衆の力が日本には欠如していた。岩波文化人は一所懸命やっていたし、労働運動も、学生も一所懸命取り組んでいた。しかしそれを一つの政治力にしていくことができなかった。政治力というのは拒否する力です。その拒否力を作ることができなかった。それが60年も僕たちを縛っている。こゝろ言わなければならぬのはとても残念ですね。しかしこの課題をこなせるかどうか、いま再び試されている、そういう時期に入っている、そう思います。これからの100年を考える、国内に、また世界にいかにしてその政治力を作っていくかというのは、巨大な課題ですね。われわれは先がないので考えてもしょうがない。でも考えないわけにもいかなない、問題は考えるところなんかやりたくなくなるということですね(笑)。

吉川 武藤さんが話した寒かった農村調査のことはとても忘れませんよ。このときの私たちの話は、作家のきだみのるの『氣遣い部落紳士録』に「山村工作队異変」として出てきてるんですよ。私も前に自分の活動というものも失敗だったなあと書いたことがあります。でも、つまらなかつたかという、そうではないんですね。面白かつたな、もう一度やるかといわれたらやるのではないかな、と思います。悪い人生ではなかつたんじゃないかと。生まれたのは満州事変の年で、それか

ら何度戦争を経験したか、そして50年の朝鮮戦争以来、いったい何回戦争反対をやったか、こんなに戦争と付き合つた時代の人間もあんまりいないんじゃないかと思えます。私も4月28日の「国恥記念日」に学生のストライキの議長をやつて退学になるんですが、反安保闘争は実はそこからずっと続いているんですね。けれども3・11以降全国に広がりがつたあるこの脱原発の大きなうねりの中で、日米安保体制との結びつきを問う議論は非常に少ないですね。安保に言及すれば政治的になり孤立するのでは、それはまずいと思う人も多いのだと思います。この武藤論文(潜在的核保有と戦後国家―フクシマ地点からの総括)「社会評論社」にはこの二つが密接不可分なものだということが、きっちり書かれてあります。すばらしい本で、ぜひ読んでいただきたい。われわれの50年以上の活動がこれからよくなる可能性がある、ぜひこれはやってみていなあと思つています。といつても私は体がもうだめなことは確かなので、会うといや元氣じゃないかと期待されるのは大変困ります。

この会には北海道から、同じく80歳の花崎昇平さんも駆けつけてくれました。作家の彦坂諦さんの「戦後の運動の失敗の歴史が今日の日本を作ってしまったけれど、80年生きてきてなお、失敗を口にされ、新しく生きよう」とされている3人はすばらしい。の言葉と共に、あわせて240歳の三人のゆるぎない背中、会場から大きな拍手が送られました。

(まとめ 阿部めぐみ/本誌編集委員、写真 大木茂)

わたしの仕事場から、神楽坂までは歩いてすぐだ。明治時代以降、夏目漱石をはじめとして文学者が多く住んでいたせいかな、神楽坂には原稿用紙で有名な文房具店が二軒ある。相馬屋と山田紙店である。相馬屋の原稿用紙は、漱石のほか、北原白秋や石川啄木が愛用した。この店を紹介する新聞記事には、店先を通った尾崎紅葉が、置いてあった紙に「枘目を入れてほしい」と注文したのが原稿用紙製作の発端だったとある。いっぽうの山田紙店製では、吉行淳之介が、罫線が黄色い原稿用紙を三〇年以上にわたって大量に買いつづけた。江戸川乱歩が愛用したのはどちらの店のものだったか。

連載エッセイ第26回

原稿用紙の変転

鈴木一誌

期には、字詰も行数もさまざまな試行がおこなわれた。明治期の、樋口一葉の原稿では、一八字×二十二行、二十七字×二十六行、三〇字×一二行など、さまざまな枘目が使われている。漱石にも、二四字×一二行や九字×一〇行などの原稿用紙がある。

原稿用紙が生まれた際の時期、文体も文字の書きかたも揺れていた。〈言文一致体〉が模索され、文字どうしを連綿と続けて書く〈崩し字〉が駆逐されていく時代でもあった。残された資料によれば、樋口一葉は、「たけくらべ」の原稿を律義に一文字ずつ枘目を埋め

紙が（いまのかたち）になったころの光景だ。原稿用紙の淵源は、江戸時代初期に刊行された仏典の木版印刷にあるとも、一九世紀初期の頼山陽にさかのぼるとも言われるが、活字印刷と並走してきた原稿用紙は、ほぼ一〇〇年の歴史をもつと言える。その原稿用紙を使う機会は激減した。わたしは現在、山田紙店のヨコ書き四〇〇字詰原稿用紙を愛用しているが、原稿用紙ではなく、レポート用紙の代わりにしか使っていない。いま目前にあるのは、役割を終えようとしている原稿用紙のすがたである。事情は、中国や韓国でも同様だろう。

ペラと呼ばれる二〇〇字詰にするか、四〇〇字詰がよいのか、罫が何色で、紙

質を万年筆に適したものか、はたまた鉛筆書き向きを選ぶかは、〈枘目の空白〉とたたかわなければならぬ書き手それぞれのデリケートな好みによる。短冊のように細長い、一〇〇字詰の原稿用紙を特注した作家もいた。

「二〇字×二〇行」の定着はそう古いことではなく、明治末から大正時代にかけてで、一般用に商品化されるのは、大正末期である。

明治期、活字を一文字ずつ組む金属活字印刷が急速に広まり、文字数の数えやすさを求めて、一枘に一文字ずつを書くことを強制する原稿用紙が普及していく。原稿用紙の揺籃

つつ、そのいっぽう友人への手紙では、〈崩し字〉をスラスラとしたためている。一文字ずつの〈デジタル〉なモードと、連綿たる〈アナログ〉なモードとのふたつが、女流作家の内部には同居していた。

一六五九年創業という相馬屋の二一代目・現店主は取材に答えて、「原稿用紙がいまのかたちになったのはほぼ五〇年前」と語る。大岡昇平は、まささらな原稿用紙の束が文字少年少女にとっていかにあこがれの対象だったかを記している。大岡たちが丸善店頭で原稿用紙を溜め息とともに眺めたのは、原稿用

タテ書き四〇〇字詰原稿用紙の多くには、中央の空白部に「一」のようなかたちがある。正確に二つ折りにするため

の〈アタリ〉で、形状が似ている点から「魚尾」と呼ばれる、漢籍の製本方法である「袋綴じ」の名残でもあって、原稿用紙の背後には、千年の歴史が潜んでいるのだ。近代における書字の変遷も見つめてきたが、いまや舞台から退場しつつある原稿用紙を愛おしく感じながらも、時代の変遷を冷徹に見なければならぬと思う。〈書くこと〉の様態の変化と同時に、わたしたちの〈話すこと〉や〈考えること〉も変容しているはずだからだ。（すずき・ひとし／グラフィック・デザイナー、題字デザインも筆者）

静かな終末への予感 「ニーチェの馬」



第61回ベルリン国際映画祭銀熊賞（審査員グランプリ） 国際批評家連盟賞 受賞

監督／タル・ペーラ 脚本／タル・ペーラ クラスナホルカイ・ラースロー 撮影／フレッド・ケルメン 音楽／ヴィーグ・ミーハイ 出演／ボーク・エリカ デルジ・ヤーノシュ ハンガリーフランスイスラエルドイツ映画 モノクロ254分 2012年1月東京・渋谷シアター・イメージフォーラムほか全国順次ロードショー

映画の紹介



●「ごうごうと音を立てて吹きまくる寒風。ハンガリーの人里離れた窪地の家にひっそり暮らす農夫と娘がいる。60代かと思われる父親は、右半身が不自由で、もはや農作業もままならないようだ。30代か40代の娘は水汲みから食事、洗濯など、家事労働いっさいを引き受けている。馬小屋ではたった1頭の馬が年老いて疲れ果て、死にかけている。」

●「生きのびるための毎日の二人の行動が、ひとつひとつ丹念に描かれる。ランプや竈の火入れ、数十メートル離れた井戸への水汲み、父親の着替え、そして茹でたジャガイモ1個だけの食事。熱いイモの皮を素手で剥いてつぶし、塩をつけて食べる食事は、まるで辛い仕事のようにだ。その間、会話はほとんどなく、表情によるコミュニケーションすらない。」

●ある日、知り合いの男が現われ、焼酎を1杯所望した。男は酔ううちに能弁になり、世相を嘆き始める。「人間は皆腐敗してしまつた。われわれは世界を破壊している。最悪なのは、神もそれに加担していることだ。神にも責任がある」。農夫は「やかましい。出て行け」と男を追い出す。男は、小銭数枚をおいて、素直に立ち去る。

●異変は静かにやって来る。馬が全然餌を食べなくなつた。ある朝、井戸が枯れて水が出ないことを発見する。二人は引越しを決意し、家財道具を荷車に積んで出て行くが、途中で思い直して戻って来る。だが、ジャガイモを茹でる水もなく、油は残っているのになぜか

ランプの灯もつかない。闇が二人を包む。

●『「ニーチェの馬」(原題「トリノの馬」)というタイトルの、晩年のニーチェが鞭打たれている馬を見て卒倒し二度と正気に戻らなかったという挿話に基づく。その馬の飼主について想像したが、この物語になったのだと、タル・ペーラは語っている。酔って演説する男は「いわばニーチェの影」で、「私たちの出発点は、『神は死んだ』というニーチェの言葉です」とも言う。

●タル・ペーラはさらに述べている。「重要なのは、私を含め、私たち全員、人類そのものが、世界の破壊に責任があるという点です。しかし、人間を超えた力もまた働いている。映画を通して吹き荒れている風、あれも世界を破壊しています」。「世界の終りは、現実生活におけるように、ゆっくりと静かにやってくる。(中略)死の最も恐ろしいところは、何も起こっていないように見える、ということなのです」。

●黙示録的な寓話の形をとった、夢も希望もない世界である。映画に娯楽だけを、あるいは何かしら勇気づけられるものを期待する観客は興味を持たないかも知れない。もつとも、3・11以来の胡散臭い「希望」の呈示や「人間の絆」の押し売りに辟易している人は、モノクロ映像の美しさを通して突きつけられた絶望の深さに、一種の爽快さを感じるのではないか。例えばA・タルコフスキーの作品のファンなら、この映画の価値を認めるだろう。

本野義雄(もとの・よしお/本誌編集委員)



〈原発被曝労働者〉問題

樋口健二の仕事をもとめて

天野 恵一

なお続く福島原発の放射能汚染

◆今、福島第一原発の2号機から「キセノン」が検出され、原子炉内で溶けた燃料が核分裂反応を起こしている事実が確認された。この事故は、放射能をさらにふりまき続けており、東電や政府の「事故は収束」に向かっているという「安全」キャンペーンの根拠がまたゆらぎだしているのだ。この被曝大団ニッポンの現状は、あまりにも悲惨である。

原発内部を写し撮る写真集『原発崩壊』

◆さて今回は、〈被曝労働者〉問題に切りこんだ本の紹介である。このテーマの第一人者はカメラマン（ルポライター）の樋口健二であることは、誰しも認めざるをえないところであろう。



◆今年の8月15日づけで『原発崩壊』という写真集が合同出版から刊行されている。この写真集は1979年

にオリジン出版センターから刊行された『原発』（これは1996年に三一書房から再刊された）から、解説的に文章を寄せた人びとの論文をまとめて落とし、本人の解説の文章をふやし、今度の福島原発事故の写真と文章（これも本人）をプラスしたものである。「解題」という文章を寄せているのは、今回は鎌田慧のみである。その「わが同志・樋口健二さん」には、こうある。

◆「樋口さんの原発内部の労働を撮った写真は、あまりにも有名である。世界的なスクープといっても過言ではない。原発内部の不気味さと、労働の過酷さを写し撮った、きわめて貴重な写真である。ここで働く、農民、下請け、孫請け労働者の姿は、そのまま被曝労働者を生み出す労働を撮っていて、原発運動にどれだけ貢献したかわからない。／この一連の写真は、樋口の前にも、樋口健二のあとにも、原発の『放射線管理区域内』とその労働を撮ったカメラマンはだれもない、という榮譽を示している」。

◆この賛美は決してオーバーではない。まさにそこに、この写真集のスゴさがあるのだ。そして、樋口の写真（ルポ）のパワーは、単

に〈原発ファシズム〉体制が作りだしているタブーを突破する馬力にのみ示されているわけではない。そこには被曝労働者一人ひとりの写真（亡くなってしまう人はその関係者）と言葉がキッチンと収められている。そういうことを可能にする信頼関係を作りだすために樋口は、各地の労働者を何度も何度も訪ねているのだ。まさに足でつくりだした写真であり、ルポなのである。

原発労働者の友人として生きる

◆その点は「闇に消される原発被曝者」（1981年に三一書房から刊行され、2011年7月に八月書館で再刊されたもの）、『新装改訂版 原発被曝列島——50万人を超える原発被曝労働者』（1987年に三一書房から刊行されたものに新たに書き加えたもので、2011年8月に三一書房から刊行された）、『アジアの原発と被曝労働者』（1991年、八月書館）で、より具体的に確認できる。樋口は、原発労働者たちに、ただの取材対象として向き合っていない。被曝の被害者でありながら、御用学者（医者）や電力会社・裁判所が束になって、その真実を隠蔽する〈原発ファシズム〉に抗いきれずに生きている（あるいはガンになって死んでいく）一人ひとりの労働者と友人となって生きようとし続けている。それらのルポ（写真）からは、その様が生き生きと読みとれるのだ。この強烈な情熱を支えているのは、その明白な事実を、あらゆる手段をつかって隠そうとし



ている「人殺し産業」に対する真正直な怒りである。直接の被害者たちの怒りをこそ共有しようという姿勢である。

原発は本質的に「人殺し産業」

◆樋口が写真で、ルポで訴えかけているのは単純明白な一つの真実である。「パイプの森」の中の作業である原発労働は、下層労働者群によって支えられており、彼らは「使い捨て」にされている。そして彼らの肉体労働なくして原発は一日として動かないのだ。だから事故があろうがなかろうが、原発は「人殺し産業」なのである。被曝労働（者）の実態をみれば、そんなことはすぐ誰でも理解できる。樋口は、国境を超えて原発労働者（やその家族）と会い続けることを通して、その事を具体的にハッキリと示し続けてきたのだ。

◆その作業のプロセスが、ここで紹介した写真集と、3冊の著作を産み出したのである。

私たちは、樋口の怒りの深化が、この長い長い作業の原動力であり続けていることを、それを手にすることで確認できるのである。

◆「原発崩壊」に収められた文章で樋口は、福島原発事故にふれてこう語っている。



闇に消される
原発被曝者
樋口健一



原発被曝列島
樋口健一



アジアの原発と被曝労働者
樋口健一

（あまの・やすかず／本誌編集委員）

「私は今回だけは取材を断念せざるを得ない状況にあった。JCO臨界事故翌日に、現地で無防備にちかい姿で取材を続けたことで、数年後、鼻血がよく出るようになり、血液内科で検査を受けると『再生不良性貧血』と診断された。そんなありがたくない病気を背負い込んだからである。／それでも原発事故から3カ月たつと、いてもたつてもいられなくなり、編集部との協力を得て6月7日、8日に取材に出かけたのである」。

こうまで樋口を突き動かすものは何か。それは、闇に葬りさらされてきた被曝労働者たち一人ひとりに対する鎮魂の意思であり、この死者をさらに再生産し続けている（原発ファシズム）体制全体への真正面からの怒りである。

◆重大事故の進行中の今、野田政権や電力資本は、原発再稼働に向かって動き出している。この被曝大国ニッポンの出口のない絶望的な現実。この樋口の一連の仕事（とその姿勢）は（絶望などしているヒマはない、出口は自分たちの手でつくれ）、そう私たちに告げている。

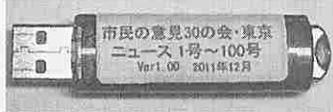
市民の意見・ニュース(1号〜100号) 電子版アーカイブスの頒布

これまで何回か市民の意見・ニュースの電子版（CD-ROM化）提供の準備を進めていることをお知らせしてきましたが、1号（1988年発行）〜100号（2007年発行）の各号をUSBメモリに収容した電子版を、今度やつと提供できることになりました。

電子版では20年間におよぶ各号を読むだけでなく、記事のタイトルの一部分、あるいは著者名・号数を指定して、5000項目の記事から目的とする記事を探し出して読むこともできます。是非ご利用下さい。

100号以降の号を含む電子版については現在準備中です。今回ご購入頂いた方にはバージョンアップ用媒体のお申し込みがあれば有償でお届けする予定です。

詳細をお知りになりたい方、あるいは購入をご希望の方は、TEL: FAX: Eメールで事務局までお問い合わせください。なお電子版（USBメモリ）の頒布価格は2,000円（送料込み）です。



橋本 保彦（はしもと・やすひこ／事務局）

読者の声

★吉川さん、生涯現役で

東京都西東京市 渡辺厚子

いつもニュースをありがとうございます。また、拙文を快くのせて下さいます。感謝致しています。No.127号の編集後記にもとりあげていただき汗顔の至りでした。ありがとうございます。No.127号に吉川さんが第一線から退かれる意向のあることが記載されていたので失礼をかえりみずお手紙する次第です。

私は障がい児学校に勤めていた労働者です。日々生起すおかしなことに憤り、それは変だ、と言いつつ続けてきました。

異動要綱が改悪され、校長の「お情け」にたよらないと希望通り残れなくなった時も、父の看病を抱えて大変でしたが、それはおかし、と原則を訴えたら10人中校長具申した9人は残れて、ただ一人とばされるという目に合い、同僚から融通をさかせない奴とせせら笑われたり、都労連が団交して研修レポート3千字を書けば賃上げすると妥結した時にもそれはおかしい、と書かなかつたら再三管理職から退職金ウン百万の差が出るから書けとか組合からも言われ、偏屈な奴と陰口をたたかれ、いささか自分でもちよつとおかしい

のかなあ、と肩をおとした時があります。

そんな時、吉川勇一さんの言葉、戦争反対などと、急にその時にできるはずがないんだ、日々の中の小さな不服従の積み重ねが可能にするんだ、という内容をきいてとつても勇気づけられ、そうだ、変なことはやっぱ見過ごすまい、妥協すまい、と胸をはれたのです。不服従をはつきり意識しました。

これが のちのちの「日の丸・君が代」の不服従にすつきりと向かっていけたもどたつたよな、とよく思いかえすのです。

吉川勇一さんの言葉（と実践）は私におおきな力と自信、指針を与えました。ですから吉川さんには、決して第一線を退いて欲しくありません。何をなさらなくてもよい、そこに存在する、ということ自体が大きな意味をもっている、と私は思っています。

どうか吉川さんには生涯現役でいてください。今、私は母の介護に時間をさかれていて何の事務作業のお手伝いもできないので心苦しいですが、吉川さんには作業や仕事はなさらずとも居てほしいと心から願います。先達として、代表であり続けて下さい。お願いします。

★室謙二・吉岡忍対談に得心

東京都世田谷区 長谷川修児

127号読み切りました。室謙二・吉岡忍

対談、短い対談録の中に重要な提起がいくつもなされていて得心いたしました。かつて日本にも「実験的空間」が社会の中にあつたけれど、今ではまったく埋められてしまったという事実はその通りですね。

前田哲男論文も重要な指摘をされています。この論文と室・吉岡対談は「自衛隊」という存在について対になっていて大変参考になります。好一对の巻頭読物に引きずられて一気に読み切った127号でした。

★よい社会にするための活動を

埼玉県戸田市 田中美秋

良い社会にするためにご活躍をお願い申し上げます。

★新聞にない情報がよい

大阪府高槻市 沖村京子

情報はとても勉強になり、新聞では得られない情報満載でありがたい。

★脱原発と電気の浪費に矛盾を思う

福岡県久留米市 東 真喜子

脱原発と言いつつ、電気を浪費する矛盾を感じつつ。

★ノーモア・ヒロシマ ノーモア・フクシマ

千葉県千葉市 長谷好男
ノーモア・ヒロシマ、ノーモア・フクシマ！

脱原発の取り組みを大きくーがんばって！

★励まされる記事

静岡県浜松市 曾谷道子
毎号、拝読して大きな励ましをいただいています。御礼。

★大切な情報です

埼玉県さいたま市 神川辰子
いつも大切な情報をありがとうございます。

★生きるエネルギーです

東京都杉並区 道津弘二
「市民の意見」を読んで世界が広がり、生きるエネルギーとなってます。

★拠り所となる「市民の意見」

秋田県鹿角市 佐藤和夫
スタッフの皆さんのお仕事、本当に有難うございます。どの号でも主張、論旨、総合誌よりも適確でいつもよりどころにさせていただいております。

★会費振り込み案内を分かり易く

東京都武蔵野市 阿部美智子
1回目をいつ振り込んだかを忘れました。何かサインがあるとよい。(封筒の宛名シールの右下記載の会員期間をご参照下さいー編集部)

★工夫がほしい会費切れの案内

東京都板橋区 棚橋寿郎
昨年2月に会費を納入したまま失念。私のように失念しやすいシルバー会員に「会費切れ」の判などを。(他の会ではあるのです)(会費切れの会員には、会費切れのご通知を同封して送っています。どうぞご確認下さいー編集部)

★次世代へ負担を残さないように

徳島県小松島市 萬宮千鶴子
日々の活動、ありがとうございます。簡素に質素に生活することを願っての毎日です。次世代へ負担を残さないようにしなければと思うこのごろです。

★9条を守れ

愛知県名古屋市中 山下智恵子
9条守れー原発不要ーよろしくお願いいたします。

★大阪府の君が代条例の廃止を

大阪府高槻市 野口里子
今、大阪の教育が危ない。6月「大阪維新の会」は府議会において全国に先がけて「君が代起立条例」を強行可決した。数に物を言わせた暴挙である。9月には「処分条例」の成立を狙っている。権力により教職員の管理統制を強化し、物言えぬ教師を作ろうとしている。戦後60有余年築いてきた民主教育を阻

もうとしている。我々は民主教育の灯を消す訳にはいかない。処分条例を廃止・撤廃させるために立ち上がろう。

★自分の頭で考えることの大切さ

兵庫県神戸市
玄米と旬の野菜ーMOMONGA
初めて会報を読み、その充実ぶりにビックリしましたー「ドイツから見る福島原発事故」(編集部注:126号、梶川ゆうさんの記事)がとってもよく、自分の頭で考える。ことの大切さを改めて実感。できることは何でもやるーという気持ちをもって、明るくタフに向かっていきますようー

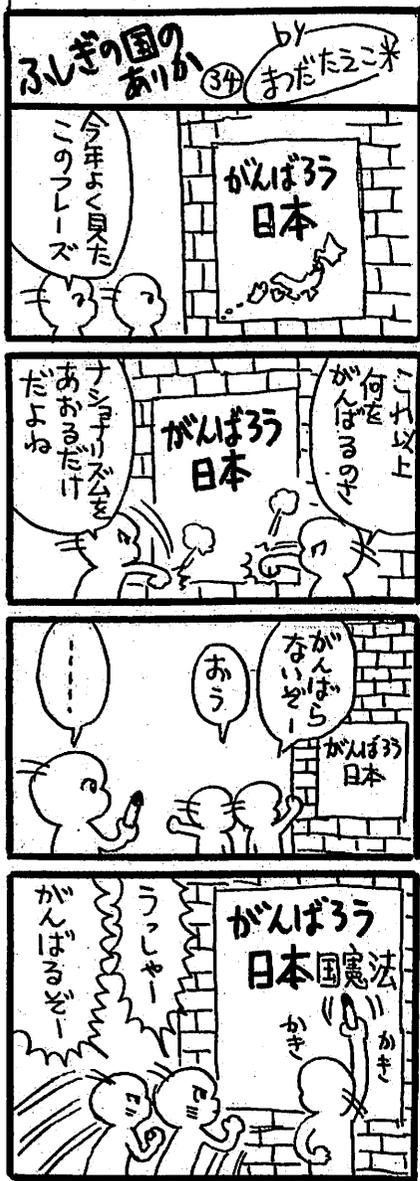
★良い記事がある

千葉県市川市 佐々木善治郎
ロボットの米国利用の記事など興味深く考察しています。1930年生81歳、よろしくお願ひします。

【訂正】

前号(128号)の読者のおたより欄34ページ記載の読者のお名前が誤っておりました。謹んでお詫びして訂正致します。
(誤) 粕谷 努→(正) 粕谷 力

「読者のおたより」の多くは、会費納入の際の郵便振替票に書かれているメッセージを使わせていただいています。掲載について匿名をご希望の方は、その旨明記していただけると幸いです。



Information

【東京都】 ☆開催中 (12月27日まで) 「たたかいつづけたから、いまがある—全療協 60年のあゆみ—1951年～2011年」 場所: 国立ハンセン病資料館 (西武池袋線「清瀬」駅南口または西武新宿線「久米川」駅) 北口より、西武バスで「ハンセン病資料館」下車)、入館料無料、開館時間 9時30分～16時30分 問合せ: 国立ハンセン病資料館、電話 042-396-2909

☆12月3日 (土) 沖縄の若者たちによる舞台劇「フクギの雫—沖縄・宮森小学校米軍機墜落事件から52年—」、昼の部 15時30分開演「宮の森小学校事件のお話～フクギの雫」、大人 3000円、高校生以下 (18歳以下) 2000円、夜の部 18時開演「フクギの雫～大田昌秀元沖縄県知事講演 (19時30分)」 場所: 文京シビックセンター (地下鉄「春日」駅または「後楽園」駅直結) 大人 3500円、高校生以下 (18歳以下) 2500円 主催: 「フクギの雫」実行委員会、問合せ: 原爆の図丸木美術館、電話 0493-22-3266

☆12月3日 (土) 18時30分 第65回憲法市民講座「食べものと放射能」 話: 安田節子、資料代 800円 場所: 文京区民センター (地下鉄「春日」駅または「後楽園」駅下車、徒歩5分) 主催: 許すな! 憲法改悪・市民連絡会、電話 03-3221-4668

☆12月5日 (月) 18時30分 「防衛省抗議行動」 主催: 沖縄・一坪反戦地主会・関東ブロック、電話 090-3910-4140 *毎月第1日曜日に抗議行動をしています

☆12月11日 (日) 13時 「全国から電力会社・経産省を包囲しよう! 12・11デモ」 デモ出発: 14時 場所: 日比谷公園 (地下鉄「霞ヶ関」駅、徒歩5分) 呼びかけ: 11・11-12・11再稼働反対! 全国アクション実行委員会 電話 03-6424-5748 (ピープルズ・プラン研究所) *12日 (月) 各省庁、電力会社に対する省庁交渉及び要請行動を予定

☆12月23日 (金・祝) 15時 「原発ファシズム・天皇制」 話: 田浪亜央江、山口素明、天野恵一 場所: 千駄ヶ谷区民会館 (JR原宿駅、徒歩10分) 主催: 反天皇制運動連絡会 FAX: 03-3254-5460

【埼玉県】 ☆開催中 (12月3日まで) 「今日の反核反戦展 2011」 場所: 原爆の図丸木美術館 (東武東上線「東松山」駅東口、市内循環バス浄空院入口下車、徒歩5分、東武東上線「高坂」駅西口、丸木美術館北下車、徒歩2分) 入場料: 大人 900円、中高生・18歳未満 600円、小学生 400円、主催: 原爆の図丸木美術館、電話 0493-22-3266 休館日: 毎週月曜日

【神奈川県】 ☆12月16日 (金) 18時30分 「ナショナリズム、「日の丸・君が代」、天皇制・・・戦後をやりなおしたい—3・11、その後の私たちに問われているもの」 話: 北村小夜、場所: かながわ県民センター (JR「横浜」駅、徒歩5分) 主催: 「日の丸・君が代」の法制化と強制に反対する神奈川の会

【大阪府】 ☆12月7日 (水) 14時 「大阪空襲訴訟第一審判決」、判決後、最寄りの会場で報告集会があります 場所: 大阪地方裁判所 (京阪電鉄「なにわ橋」駅、徒歩5分) 問合せ: 大阪空襲訴訟事務局、電話 072-271-5364 (安藤)、大阪空襲訴訟弁護団、電話 06-6942-7860 (大阪中央法律事務所)

【京都府】 ☆開催中 (12月17日まで) 9時30分から16時30分、立命館大学国際平和ミュージアム「プリーモ・レーヴィアウシュヴィッツを考え抜いた作家」 場所: 立命館大学平和ミュージアム (JR・近鉄「京都」駅より市バス50にて「立命館大学前」下車、徒歩5分) 参観料: 大人 400円、中・高生 300円、小学生 200円 問合せ: 立命館大学国際平和ミュージアム、電話 075-465-8151

☆12月11日 (日) 13時30分 「罪と罰を超えて 死刑のある国で<厳罰化>を考える」 講演: 森達也、浜井浩一 場所: ひと・まち交流館 京都大会議室 (京阪電車「清水五条」駅、徒歩5分、地下鉄烏森線「五条」駅、徒歩10分) 資料代: 1000円 (学生 700円) 主催: 京都にんじんの会 電話 090-2199-5208 (大須賀)

事務局だより

野澤 信一

■先日の事務局会議では、平和運動や市民運動のあり方に関して「同じ目的を持って大同につくためには、過去の経緯は水に流しても良いのか否か」という話で1時間くらい盛り上がりました。運動の現場に今も影を落とす案外深刻な問題なのですが、「事務局会議」でこんなことを自由に話し合えるのが市民運動の良いところですよ。という「無茶振り」から、いろいろなことがあった今年の事務局を振り返ります。

305 市民の意見30の会・東京

20 数年ぶりに建物の入り口に事務局の「看板」が設置されました。この看板を目印に事務所をお訪ね下さい。

■2月1日発行の今年最初の事務局だよりの誌上で、同欄を長年担当されていた吉川勇一さんが突然「事務局だより執筆は：私としては最後にいたします」と宣言されました。吉川さんは突然の宣言で良く周りを驚かさず癖があります。しかし、思いつきで話したり官僚の振り付け通りに動くどこかの国の政治家とは異なり、その発言の裏には人と状況を見る冷静な眼とあらゆる修羅場をくぐり抜けてきた確かな判断がある

ことが常でしたから、結局は目論見通りにことは進んでしまうのです。そこで不意を突かれ妙案もないまま、事務局のメンバーが輪番で書くことにしようか、ということに落ち着き、一番手を引き受けて下さった高橋武智さんが何と4号分も続けて書いて下さいました。その武智さんが大きな眼と優しい口調で「もうそろそろ代わってもいいかな」というので、今回はほくにお鉢が回ってきた次第です。

■1〜3月の事務局は5月3日の新聞掲載に向けた「意見広告」の作業が大詰めを迎えていました。また辺野古への基地移転の動きが再び活発化し、貧困問題を置き去りにした増税やTPP参加を主張する菅民主党政権とどう向き合うか、という重苦しい議論が交わされていきました。他方で、北アフリカ・中東での民衆の蜂起と民主化への動きという久々に明るい話題では、みな表情も和らぎました。そんな矢先、4月1日号の掲載記事もほぼ集まった3月11日に東日本大震災と福島第1原発事故が起こります。長年、反原発を唱えながら、こうした事態を許してしまつた無念さと後悔で男性陣が言葉を失っている中、女性陣は直ちに家族の避難に動くなど、行動力の差は歴然。

■4月以降は、次々と報じられる地震・津波災害の凄まじさと全てを失つた被災者の境遇に心を震わせながらも、やはり一番の関心は原発問題に集まりました。事故を起こした東京電力はもちろん、いわゆる「原子力村」の

政治家、官僚、学者の不誠実で無能な対応に怒り心頭に発しながら、シーベルトやらベクレルやら、にわか勉強にも大わらわでした。普段から交流のあった「たんぼ舎」や「原子力資料情報室」があんなに頼もしく見えたことはありません。その後、6月1日号、8月1日号、10月1日号と3号続けて東日本大震災関連の特集が生まれ、マスコミでは報じられない多様な視点からの報告や、かつてない広がりを見せる脱原発行動の記事を掲載しました。そんな慌しい中、5月3日には朝日新聞と被災地の地方紙2紙に全面意見広告を無事掲載することができました。

■今年事務局の体制も変更になりました。発足以来、本会の中心を担って来られた吉川さんから、高齢と体調を理由に代表を退任したい旨の申し出があり、事務局内で相談した結果、無理な負担を掛けぬよう、高橋武智さん、本野義雄さんを加えた3名による共同代表制をとることになりました。今年80歳を迎え「お元氣そうですね」と声を掛けられるたびに、「俺は满身創痕であつて、元氣ではない」と言つて回つていくという吉川さん。10月末に、学生時代からの「盟友」武藤一羊さんとお二人合わせて160歳のお祝いの会が、百数十人を集めてにぎやかに行われました。ご心配なく！十分にお元氣です。

(のざわ・しんいち/事務局)

編集後記

◆長年の読者の方はお気づきかと思いますが、本誌の編集は、毎号担当責任者が交代しています。担当者に対するねぎらいと若干の冷やかし(?)も込めて、内部では「編集長」と通称しています。

◆しかし「編集長」には二つの特権があります。それは表紙の絵と巻頭詩を選ぶ権限です。表紙の絵は、「無言館」のご好意で同館保有の絵を掲載させて頂いており、画集の中からこれを選ぶのは中々楽しい作業です。

◆他方、星の数ほどある詩の中から巻頭詩を選ぶのは、なかなか大変です。手元の詩集だけでは限られてしまうので、先日も近くの図書館の詩の書棚で、何冊かの詩集を手にとって、パラパラと見ていました。で、偶然目に飛び込んできたのが、掲載した「反対」です。数十年前、就職試験の面接で社会人になる心

構えを聞かれて「青臭さを失いたくないと思います」と答えて変な顔をされ、新入社員歓迎の宴会で指名されてつい「反戦歌」を歌ってしまった身としては、痛く気に入りました。

◆早速詩集を借りて来て連れ合いに感想を聞きました。彼女曰く「まるでパパみたい」と。

(野澤信二)

◆編集委員 阿部めぐみ、天野恵一、有馬保彦(次号担当)、杉内蘭子、高岡甫雅、高橋武智、西田和子、野澤信一(本号担当)、道場親信、本野義雄、諸橋泰樹、吉川勇一、吉田和雄

会計報告

秋になり千葉に住む母から新米が届きました。知り合いの農家から自家消費用を分けていただくので市販のものより美味しく、私も毎年楽しみにしています。いつもなら嬉しくてすぐにでも友人にお裾分けの電話をするのですが、今年はどうしたものかと。せっかく孫を喜ばせようと送ってくれた母や農家の方

に「放射能は大丈夫？」と、問い合わせることもできず、結局、家族だけで食べています。新米は今年も変わらず秋を届けてくれたのに。

さて、今期は残念ながら久々に赤字となりました。支出額はいつもと変わりませんが、6月以降続いていた新規入会者の増加が一段落し、収入額が少し減ったためです。しかし、基本会計は前年に比べまだ余裕がありますのでご安心ください。

前号でお願いしましたとおり会費の前納を2年までとさせて頂いたため、9月以降これを超えてご入金頂いた分は「カンパ」として処理させて頂きました。どうぞご了承くださいます。

尚、会費の有効期限は「市民の意見」を送りする封筒の宛名シールの右下に印刷されていますので、ご確認ください。(上口)

市民の意見 30の会・東京 2011年9月～10月会計

1. 収入	
一般会費	221,500
協力会費	120,000
敬老会費	293,000
障害者会費	9,000
(会費小計)	643,500
カンパ	153,900
ニュース販売	1,200
バグ等販売	2,370
銀行利息(*1)	466
集会入場料(*2)	22,000
雑収入(*3)	1,500
預り金	89,000
立替金精算	157,530
収入計	1,071,466
2. 支出	
印刷費(*4)	241,494
発送費	159,140
通信費(*5)	62,593
消耗品費(*6)	54,870
編集費	45,375
会場費(*7)	15,000
交通費	65,800
事務所費	220,000
光熱費	15,854
手数料	31,540
諸会費(*8)	67,911
雑費	14,168
預り金精算	364,500
支出計	1,358,245
3. 収支 (286,779)	
前期からの繰越	8,109,978
次期への繰越	7,823,199
4. 残高の内訳	
会基本会計	6,357,963
条約基金	176,715
F/I基金	1,165,820
預り金	122,701
計	7,823,199

(単位：円)

注 (*1) ゆうちょ銀行普通預金利息。(*2) 読者懇談会9、10月2回分計¥500×22名。(*3) 外部団体への事務所貸出入。(*4) 128号印刷費¥234,354。[9・11アクション] ご案内はがき印刷費¥7,140。(*5) ジェイナビ半年分¥31,500他電話、切手代等。(*6) プリンターナー¥27,384。[30の会] 印鑑¥10,290、事務所案内板¥8,400他。(*7) 読者懇談会スペースたんぼぼ¥13,000、PP研¥2,000。(*8) 「バルーン大作戦」へのカンパ¥64,911。[9・11アクション再稼働反対] 賛同金¥3,000。